

令和6年度 日本赤十字社北関東三県支部

青少年赤十字国際交流マレーシア派遣報告書



派遣期間 ▶ 令和6年7月21日(日)～26日(金)

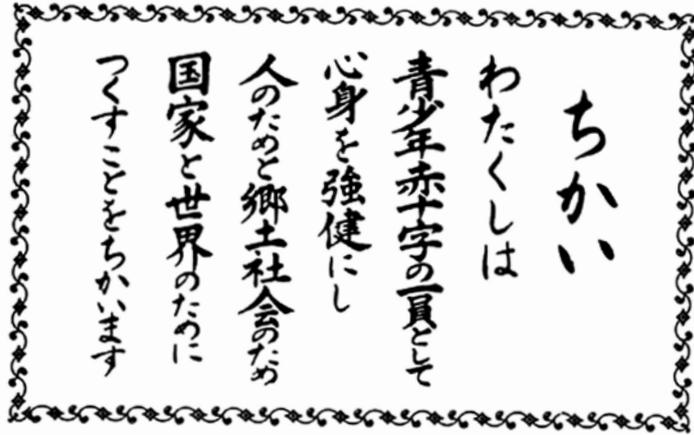


日本赤十字社茨城県支部
日本赤十字社栃木県支部
日本赤十字社群馬県支部



CONTENTS

日本赤十字社北関東三県支部代表事務局長挨拶……………	1
団長挨拶……………	2
リーダー挨拶……………	3
青少年赤十字国際交流派遣事業実施要項……………	4
団員名簿……………	7
派遣日程……………	8
団員プロフィール……………	10
行程日誌……………	13
公式訪問記録……………	19
自由研究……………	24
感想文……………	39
追録：事前・事後研修会、お世話になった方たち……………	60
追録：お土産贈呈……………	61



ちかい
わたくしは
青少年十字の買とて
心身を強健にし
人のためと郷土社会のため
国家と世界のたんに
つくすことをちかいます

空は世界へ

- 一、空は世界へ つづいてる
空は世界を だいている
みんなごらんよ あの空を
空が僕らの 私らの
こころよ心よ 少年赤十字
- 二、花はだれにも 匂つてる
花はやさしく 匂つてる
みんなごらんよ あの花を
花が僕らの 私らの
すがたよ姿よ 少年赤十字
- 三、星はどこでも 光つてる
星は伸よく 光つてる
みんなごらんよ あの星を
星が僕らの 私らの
ほこりよ誇りよ 少年赤十字
- 四、旗は十字の 愛の旗
旗はかがやく 愛の旗
みんなごらんよ あの旗を
旗が僕らの 私らの
しるしよしるしよ 少年赤十字

青少年赤十字の歌

- 一、明けそめる 大空に
みなぎる光 あふれるいのち
われら若人 われら若人
健康の足並そろえ
進むのだ かがやく途を
ひとすじに かがやく途を
- 二、さしのべる手を 組んで
あわせる力 つらぬくまこと
われら若人 われら若人
清純の ちかいにこそり
尽くすのだ 世界のために
人のため 世界のために
- 三、海こえて へだてなく
呼び合う心 ゆき交うこだま
われら若人 われら若人
親善の 結びもかたく
仰ぐのだ 十字の旗を
ひるがえる 十字の旗を

日本赤十字社北関東三県支部代表事務局長挨拶



日本赤十字社群馬県支部

事務局長 内田 信也

「日本赤十字社北関東三県支部青少年赤十字国際交流派遣事業」は、日本赤十字社三県支部（茨城・栃木・群馬県支部）が、青少年赤十字の実践目標の一つである「国際理解・親善」の具体的な活動の機会として、青少年赤十字メンバー及び指導者を海外の赤十字（赤新月）社に派遣し、赤十字事業の視察やメンバーとの交流を通して、両国の青少年赤十字活動の普及と発展に寄与することを目的として実施しているものです。

昭和63年から、毎年、継続して実施しており、これまでにネパール、インドネシア、オーストラリア、カンボジア、モンゴル、ベトナム、シンガポールなど多くの国々に青少年赤十字メンバーと指導者等を派遣してまいりました。

コロナ禍により令和2年度から5年度までの間は実施できませんでしたが、本年度、各県支部から推薦のあったメンバー15名（高校生）に指導者と事務局職員等を加えた総勢21名を、5年ぶりにマレーシアへ派遣いたしました。

事前研修を含め、令和6年7月21日から26日までの5泊6日の日程で、赤新月社をはじめ、IFRC、病院、赤新月加盟校を訪問しました。そして、それぞれの訪問において、素晴らしい交流を体験してきました。特に、赤新月加盟校における交流は、受け入れ校の心のこもった歓迎により、マレーシアの文化に直接触れるなど、参加者全員の記憶に深く残るものとなりました。

そのような体験内容を具体的に本報告書に取りまとめました。参加された皆さんの生き生きとした活動の内容と感想が綴られています。是非、ご熟読いただき、その内容を追体験していただきたいと思っております。そして、本事業への理解を深めていただくとともに、引き続きのご支援・ご協力をお願いいたします。

結びに、本事業の実施に当たり、ご理解・ご協力をいただいた保護者、学校関係者の方々や、適切なご指導、ご協力をいただきました各県支部、日本赤十字社本社の関係者の皆様方に深く感謝申し上げますとともに、来年度以降も本事業が多数の参加者を得て、さらに、充実・発展していくことを祈念いたしまして、代表支部の挨拶とさせていただきます。

団長挨拶



成長と絆を育む国際交流事業

群馬県立伊勢崎工業高等学校

教諭 天宮賢也

この度、青少年赤十字の国際交流事業において、団長を務めさせていただきましたことを大変光栄に思います。令和6年度の本事業では、北関東三県（群馬、栃木、茨城）から各5名の高校生が選抜され、各県から教員1名が帯同しました。また、幹事校である日赤群馬県支部の職員2名と、前橋赤十字病院の看護師1名が加わり、合計21名の国際交流事業団としてマレーシアに4日間滞在いたしました。

期間中、私たちは国際赤十字・赤新月社連盟（IFRC）アジア大洋州地域事務所やマレーシア赤新月社（MRC）、そしてマレーシア赤新月加盟校2校を表敬訪問しました。これらの訪問先で生徒たちは、自ら考えた発表や交流アトラクションを披露し、現地の生徒たちとの交流を深めることができました。彼らの発表には、個性と創造力が盛り込まれており、大変素晴らしいものでした。

特に印象深かったのは、生徒たちの積極的な姿勢とチームワーク、そして創造力でした。発表や交流アトラクションの準備に際しては、限られた時間の中でアイデアを出し合い、協力し合う姿が随所に見られました。彼らの努力と協力の結果、発表はどれも好印象で、マレーシアの生徒たちとも素晴らしい交流を果たすことができました。これらの経験は、生徒たちの成長に大いに寄与したと確信しております。

また、訪問先での交流を通じて、異文化理解や国際感覚を養う貴重な機会となりました。マレーシアの赤十字加盟校の生徒たちとの対話を通じて、異なる背景や価値観を持つ人々との相互理解の重要性を実感しました。言葉の壁を越えて交流を深める中で、生徒たちが感じたこの「絆」は、今後の彼らの人生においても大切な糧となることでしょう。

さらに、現地での生活や文化に触れることで、日本とは異なる環境や習慣を肌で感じることができました。これは、単なる知識としてではなく、実際の体験として生徒たちの心に深く刻まれたことと思います。異文化に対する理解と尊重の心を育むことができたことは、この事業の大きな成果の一つです。

そして、これらの経験や学びを生徒たちが各県の青少年赤十字メンバーや学校に持ち帰り、様々な形で還元してくれることを大いに期待しております。この経験が、さらなる学びと成長の糧となり、地域社会にも良い影響を与えることを確信しています。

最後に、このような貴重な経験を提供して下さった関係者の皆様、地域の皆様、そして温かく私たちを迎えて下さったマレーシアの皆様へ心より感謝申し上げます。本事業が成功裏に終わったのも、皆様のご協力とご支援があったからこそと深く感謝しております。生徒たちにとって、この経験は一生の財産となることでしょう。

ありがとうございました。

リーダー挨拶



ありがとう

高崎健康福祉大学高崎高等学校

大山桜来

この度は、令和6年度日本赤十字社北関東三県支部青少年赤十字国際交流マレーシア派遣事業に参加させていただき、ありがとうございました。このような体験をさせていただいた日本赤十字社に感謝をするとともに、この派遣事業を支えてくださったすべての方に厚くお礼申し上げます。

マレーシアから帰ってきた今、この派遣を通して経験させていただいたことは非常に貴重だったな、と改めて感じています。学生のうちに異文化交流ができる機会は貴重ですし、かつ同じ志をもつ仲間同士で交流ができるのは非常に限られていると思います。今回の派遣で私達は、普段することのできない価値ある体験をすることができ、それぞれの人生の財産になったことと思います。

全体を通して私が一番色濃く印象に残っていることはマレーシアの人々の心の温かさです。赤新月社加盟校に訪問したとき、最初は自分だけでなく、他の派遣メンバーも緊張していて、準備してきた発表が上手く行くのか心配でした。しかし、私がリーダーの挨拶を始めると、加盟校の生徒たちが温かな笑顔で大きなリアクションを返してくれました。その瞬間から空気はがらりと変わり、楽しく挨拶できたことを覚えています。その後の発表も、盛り上がりは右肩上がりで大成功を収めることができました。練習してきた台本通りの発表ではなく、その場の空気によって表現を変えたり設備の不具合があっても自分たちの力でその場を盛り上げたりすることもできました。最後の発表が終わり、全体が大歓声に包まれたとき、本当に嬉しく、感動したことを覚えています。この出来事があったからこそ、自分たちの発表に自信をもち、他の加盟校での発表も大成功を収めることができたと思います。このようなことができたのはマレーシアの人たちの心の温かさのおかげです。温かい声援は人の能力を何倍にも膨らませるのだということを私に気づかせてくれました。尊敬するとともに、本当に感謝しています。

他にも、派遣メンバー全員が今回の派遣を成功させたいという思いから前泊の夜遅くまで一緒にダンスを練習したこと、インド料理の辛さとマレー料理のタイ米の青さに驚いたこと、帰り際には涙を流しながら別れを告げ、「帰りたくないね」、「名残惜しいね」と語り合ったこと、など、今回の派遣で得たすべての経験が私達の宝物で、今後の人生の糧となることを確信しています。それぞれのこれからの人生は別々になりますが、今回の派遣事業での経験を共有していることは同じです。このことを胸に、これからの人生を実りあるものにしていきましょう！

最後になりましたが、この派遣でお世話になった先生方、看護師の金子さん、日赤群馬県支部の事務局の方々、現地ガイドのタイさん、添乗員の功刀さん、現地スタッフの方々、そして今回の派遣を支えてくださったすべての方々に改めて厚く感謝申し上げ、リーダーの挨拶とさせていただきます。本当にありがとうございました。

令和6年度日本赤十字社北関東三県支部 青少年赤十字国際交流派遣事業実施要項

1. 事業名

令和6年度日本赤十字社北関東三県支部青少年赤十字国際交流派遣事業
(略称：日赤北関東三県支部JRC国際交流派遣事業)

2. 目的

日本赤十字社北関東三県支部（茨城・栃木・群馬県支部）は、青少年赤十字の実践目標の1つである「国際理解・親善」の具体的な活動の機会として、メンバー及び指導者を海外の赤十字（赤新月）社に派遣し、赤十字事業の視察やメンバーとの交流を通して、両国の青少年赤十字活動の普及と発展に寄与することを目的とする。

3. 主催

日本赤十字社茨城県支部
日本赤十字社栃木県支部
日本赤十字社群馬県支部

4. 実施当番支部

日本赤十字社群馬県支部（担当：組織振興課 奉仕・青少年係）
〒371-0833
群馬県前橋市光が丘町32-10
TEL：027-254-3636 FAX：027-254-3637

5. 派遣先

国 名：マレーシア
赤十字社名：マレーシア赤新月社

6. 実施期間・日程

期間：令和6年7月21日（日）から令和6年7月26日（金）5泊6日
日程：派遣先の赤十字社と調整のうえ、事前研修会で説明する。
※7月21日（日）は成田・（羽田）前泊とする。

7. 主たる研修内容 事業の内容

- (1) マレーシア赤新月社の本社・支部・施設等訪問
- (2) マレーシア青少年赤十字加盟校訪問（メンバー、指導者との交流）
- (3) 赤十字事業の視察
- (4) 日本赤十字社支援事業の視察

8. 派遣団の構成

区 分		茨城県支部	群馬県支部	栃木県支部	計
団 員	青少年赤十字メンバー	5名	5名	5名	15名
	青少年赤十字指導者	1名	1名	1名	3名
本部員	支部職員		2名		2名
	看護師		1名		1名
計		6名	9名	6名	21名

9. 団員の参加資格

派遣団員の資格は、次の条件のすべてを満たしていること。

(1) 青少年赤十字メンバー

- ・青少年赤十字に加盟している中学校（1～3年生）、義務教育学校（7～9年生）、高等学校（1～2年生）、中等教育学校（1～5年生）の青少年赤十字メンバーで、派遣後は青少年赤十字のリーダーとして活動ができ、所属学校長から推薦がある者。
- ・心身ともに健康で、協調性に富み、規律に従って行動できる者。
- ・トレーニングセンターや研修会等において、体験談を発表することができる者。
- ・派遣に係る研修会（支部研修、事前研修、事後研修）の全日程に参加できる者。
- ・派遣期間の体験だけに留めず、事前からの自己研鑽に努めるとともに、その経験を通じ青少年赤十字の更なる活動に寄与できる者。
- ・本事業に参加したことのない者。

(2) 青少年赤十字指導者

- ・青少年赤十字加盟校の指導者である者。
- ・研修会等において、体験談を発表することができる者。
- ・派遣に係る研修会（スタッフ研修、支部研修、事前研修、事後研修）の全日程に参加できる者。

10. 経費負担区分

(1) 青少年赤十字メンバー

- ・旅行代金 289,131円（交通費・宿泊費・食費・燃油費等）の1/3を参加者が負担し、2/3を派遣支部が負担する。
- ・自宅一成田（羽田）間の交通費については、各支部が定める。
- ・参加者の都合により旅行を取り止めキャンセル料が発生した場合は、参加者の負担額までは参加者の負担とし、負担額を超えた分は派遣支部が負担するものとする。
- ・派遣にかかるその他経費（交流会経費、雑費等）は共通経費（派遣団員1人当たり85,000円）とし、所属支部で負担する。

(2) 青少年赤十字指導者

- ・旅行代金（交通費・宿泊費・食費等）は派遣支部が負担する。
- ※ただし、旅行支度金、日当は支給しない。

(3) その他

- ・渡航手続き、超過手荷物費用、クリーニング等個人的な費用は個人負担とする。
- ・スタッフ会議、事前研修、事後研修にかかる経費は派遣支部が負担する。

11. 派遣に係る研修会等

(1) 派遣に係るスタッフ会議

- 日 時： 令和6年5月13日（月）
場 所： 日本赤十字社本社504会議室
対 象： 支部担当職員と派遣指導者

(2) 支部研修会

- 日 時： 令和6年5月19日（日）
場 所： 派遣団員が所属する支部
対 象： 派遣団員（メンバー・指導者）、保護者、派遣団員所属校JRC担当者

(3) 事前研修会

- 日 時： 令和6年6月1日（土）～2日（日）
場 所： 日本赤十字社本社504会議室及び近隣ホテル
対 象： 派遣団員（メンバー・指導者）、本部員

(4) 事後研修会

- 日 時： 令和6年8月16日（金）～17日（土）
場 所： 日本赤十字社本社504会議室及び近隣ホテル
対 象： 派遣団員（メンバー・指導者）、本部員

※台風の影響により令和6年9月22日（日）～23日（月・祝）に延期

団員名簿

青少年赤十字メンバー

支部名	No	氏名	性別	学校名	学年	役割
茨城県	1	大金 温志	男	茨城県立緑岡高等学校	2年	サブリーダー、 公式訪問記録
	2	小林 未生	女	茨城高等学校	2年	日直（7/25）
	3	田川 京華	女	茨城高等学校	2年	連絡調整員、 公式訪問記録
	4	坂本 彩葉	女	清真学園高等学校・中学校	2年 (高校)	日直（7/22）
	5	関 健佑	男	常総学院高等学校	2年	公式訪問記録
栃木県	6	岡川 航士	男	栃木県立鹿沼東高等学校	2年	公式訪問記録
	7	中谷 心海	女	栃木県立小山西高等学校	2年	連絡調整員、 日直（7/26）
	8	渡辺 璃虹	女	栃木県立栃木女子高等学校	2年	日直（7/23）
	9	横山 沙都美	女	栃木県立真岡女子高等学校	2年	公式訪問記録
	10	松下 さくら	女	星の杜高等学校	2年	公式訪問記録
群馬県	11	佐藤 希乃花	女	共愛学園高等学校	2年	公式訪問記録
	12	池澤 星夏	女	高崎商科大学附属高等学校	2年	公式訪問記録
	13	大山 桜来	女	高崎健康福祉大学高崎高等学校	2年	リーダー
	14	中島 美咲	女	群馬県立中央中等教育学校	1年 (高校)	日直（7/21）
	15	石原 詩音	女	伊勢崎市立四ツ葉学園中等教育学校	1年 (高校)	連絡調整員、 日直（7/24）

指導者

支部名	No	氏名	性別	学校名	役割
茨城県	1	高橋 信博	男	清真学園高等学校・中学校	副団長、写真
栃木県	2	齋藤 有子	女	栃木県立鹿沼東高等学校	生活指導
群馬県	3	天宮 賢也	男	群馬県立伊勢崎工業高等学校	団長

日本赤十字社事務局

支部名	No	氏名	性別	所属・職名	役割
群馬県	1	榎原 康弘	男	組織振興課長	本部長
	2	境野 雄気	男	組織振興課 主事	庶務・会計
	3	金子 早耶香	女	前橋赤十字病院 看護師	健康管理

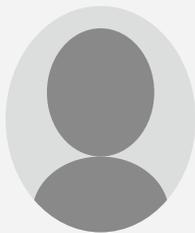
派遣日程

日付	時間	活動	場所	備考	
7月21日 (日)	午前中	各自ホテルへ			
	13:30	ホテル集合	ホテルマイステイズプレミア成田	各県メンバーと合流	
	14:00	出発式	ホテル会議室	各種資料の配付、報告書関係の説明	
	14:50	交流会の練習（最終確認）	ホテル会議室		
	18:00	夕食、翌日の準備、就寝	ホテル会議室		
7月22日 (月)	7:00	朝食	ホテル	ビュッフェ	
	7:15	ホテルマイステイズプレミア成田 出発		空港へ	
	7:40	成田空港 着	成田空港	搭乗手続き	
	11:15	マレーシアに向け出発		MH089便 昼食（機内食）	
	(以下、マレーシア現地時間)				
	17:25	マレーシア到着	クアラルンプール空港	入国手続き 現地ガイドと合流 専用バス	
	19:50	夕食（スチームボート）	レストラン		
21:30	ホテル到着 ミーティング、就寝	スイスガーデンホテル			
7月23日 (火)	8:30	ホテル出発	スイスガーデンホテル	専用バス	
	9:00	マレーシア赤新月社訪問	マレーシア赤新月社本社		
		両国代表による挨拶、記念品交換 赤新月社の施設説明、活動紹介 日本メンバーによるプレゼンテーション (日本の文化・歴史、日本の高校生、赤十字活動について)			
	12:30	昼食（飲茶）	レストラン		
	14:00	IFRC訪問	IFRCアジア大洋州地域事務所		
		施設見学 三亀さん（日本人スタッフ）の講話 日本メンバーによるプレゼンテーション (日本の文化紹介など、歌、踊り) 団長による挨拶、記念品贈呈、記念撮影、 質疑応答			
	16:30	IFRC出発		専用バス	
	16:50	Royal Selangor Head office & Visitor Center（ピューター工房） 見学			
	18:10	Batu Cave（バトゥ洞窟：ヒンズー教の聖地） 見学			
	19:15	夕食（インド料理）	レストラン		
	20:35	市内視察 ペトロナスツインタワー（スーパーマーケット）			
22:00	ホテル到着 ミーティング、就寝	スイスガーデンホテル			

日付	時間	活動	場所	備考
7月24日 (水)	9:15	ホテル出発	スイスガーデンホテル	専用バス
	9:30	現地赤十字施設訪問	KLINIK AMAL PERCUMA KUALA (病院)	
		1. 医師の方による事業紹介 2. 動画視聴 3. スタッフの方による提供サービスの説明 4. 施設見学 5. 記念品の贈呈 6. 記念撮影		
	12:20	現地赤十字施設出発		専用バス
	12:40	昼食 (ニョニャ料理)	レストラン	
	14:00	学校訪問	Technical institute of Kuala Lumpur – SMK Teknik Kuala Lumpur	専用バス
		1. 両国の国歌斉唱 2. 祈りの朗読 3. 挨拶 (校長、団長、リーダー) 4. 記念品交換 5. 現地生徒による伝統ダンス「ジョゲク・ランバク」披露 6. 派遣メンバーによる発表・交流企画 7. 軽食を兼ねたトーク交流		
	17:30	学校出発		専用バス
	18:30	セントラルマーケット到着 視察・ショッピング 電車で移動	セントラルマーケット	
	19:20	夕食 (西洋料理)	レストラン	
20:40	ホテル到着	スイスガーデンホテル		
7月25日 (木)	8:00	ホテル出発	スイスガーデンホテル	専用バス
	8:30	学校訪問	Kajang High School - SMK Tinggi Kajang	
		1. 礼拝の言葉 2. 校長、団長、リーダーあいさつ 3. 調印式 4. JRCの発表 (群馬・栃木) 5. 記念品交換 6. 植樹式 7. 軽食 8. 訪問校による赤新月社の紹介、伝統的な踊りの披露 9. JRCの発表 (茨城)、交流企画 (ダンス、歌、おりがみ) 10. マレーシアの文化体験		
	13:00	学校出発		専用バス
	13:30	昼食 (中華料理)	レストラン	
	15:00	プトラジャヤ市内視察 ・プトラモスク (見学) ・プトラジャヤクルーズ (観光)	プトラジャヤ市内	
	17:30	三井アウトレットパーク着		ショッピング
	19:00	クアラルンプール空港着		
	19:30	夕食 (マレー料理)	クアラルンプール空港	現地ガイドとお別れ
	21:00	自由時間		ショッピング
23:50	マレーシア出発	機内泊	MH088便	
7月26日 (金)		朝食	機内	
		(以下、日本時間)		
	8:10	成田空港着		入国手続き
	9:00	解散式 各自帰路へ	成田空港内	

氏名

- ①ニックネーム
- ②県名（支部）
- ③学校名
- ④将来の夢
- ⑤趣味
- ⑥好きな言葉
- ⑦マレーシアで一番の思い出
- ⑧メンバーへ一言



大金 温志

- ①あっくん
- ②茨城県
- ③茨城県立緑岡高等学校
- ④地域や社会に貢献
- ⑤食べること
- ⑥十人十色
- ⑦訪問校の生徒との交流
- ⑧みなさんのおかげで充実した時間を過ごせました。本当にありがとうございました。



小林 未生

- ①ミノ、コバヤシ
- ②茨城県
- ③茨城高等学校
- ④中学校教諭
- ⑤イラストを描くこと、ゲームをすること、好きなゲームやアニメのグッズ集め
- ⑥遠きに行くは必ず近きよりす
- ⑦現地の学校の生徒たちとの交流
- ⑧みんなと一緒に貴重な経験ができて良かったです。ありがとうございました！



田川 京華

- ①きょう
- ②茨城県
- ③茨城高等学校
- ④医師
- ⑤映画鑑賞、懐かしのボカロを聞く
- ⑥やらない善よりやる偽善
- ⑦現地校でみんなと一緒に踊ったこと
- ⑧約3ヶ月間ありがとうございました!!一生の思い出です！



坂本 彩葉

- ①エマ
- ②茨城県
- ③清真学園高等学校・中学校
- ④教育関係の仕事
- ⑤音楽を聴くこと、小説や漫画を読むこと
- ⑥世の中笑ってる奴が一番強いからな
- ⑦訪問先の学校で様々な生徒と英語で交流したこと
- ⑧とても楽しい時間を過ごせました。ありがとうございました！



関 健佑

- ①関くん、けん
- ②茨城県
- ③常総学院高等学校
- ④地方公務員
- ⑤新聞を読むこと、音楽を聴くこと
- ⑥ありがとう
- ⑦青少年赤十字加盟校の訪問
- ⑧みんなと過ごした時間は、僕にとって忘れることのできない大切な思い出になりました。本当にありがとう！またみんなと会いたいです!!



岡川 航士

- ①コウ
- ②栃木県
- ③栃木県立鹿沼東高等学校
- ④まちづくりに関わる仕事
- ⑤ギター
- ⑥成功する秘訣は、今すぐ始めること
- ⑦現地赤新月加盟校での交流
- ⑧約3ヶ月間本当にありがとうございました!!



中谷 心海

- ①たに
- ②栃木県
- ③栃木県立小山西高等学校
- ④大学進学
- ⑤音楽を聴くこと、書道、絵を描くこと
- ⑥自分を信じるのが最強
- ⑦青少年赤十字加盟校訪問
- ⑧6日間みんなと沢山話せて楽しかった！ありがとう！



渡辺 璃虹

- ①ナベ
- ②栃木県
- ③栃木県立栃木女子高等学校
- ④研究者
- ⑤音楽を聴くこと
- ⑥努力に勝る才能なし
- ⑦寝坊して大慌てで準備したこと
- ⑧みんなと楽しい思い出が作れて幸せでした!!ありがとう。



横山 沙都美

- ①よこ
- ②栃木県
- ③栃木県立真岡女子高等学校
- ④復興支援に携わる仕事
- ⑤推し活（嵐、Snow Man）
- ⑥明けない夜はないよ
- ⑦事前研修では想像がつかないほどメンバー全員&引率者の方々との距離が縮んだこと
- ⑧最高で幸せなひとときだったよ！出会えた事、共に過ごせた事、本当に良かった!!



松下 さくら

- ①ささ
- ②栃木県支部
- ③星の杜高等学校
- ④大学進学
- ⑤音楽聴くこと・旅行
- ⑥成功は失敗の元
- ⑦現地校との交流
- ⑧初めての海外が皆と一緒に良かった。楽しかったからこそ、お別れするのが寂しいです。素敵な6日間をありがとう！



佐藤 希乃花

- ①ののの
- ②群馬県
- ③共愛学園高等学校
- ④人のために働くこと
- ⑤ダンス・人と話すこと
- ⑥おかえり
- ⑦南国フルーツパーティー
- ⑧ほんっとに最高の1週間でした！このメンバーで研修を行えたことがすごく幸せです！思い出に残る研修をありがとうございました！



池澤 星夏

- ①せなび
- ②群馬県
- ③高崎商科大学附属高等学校
- ④世界的に活躍する動物看護師
- ⑤ギターを弾くこと！バンドしてます！
- ⑥人生の三つの坂
上り坂 下り坂 まさか
- ⑦ご飯が青くてプリンが緑かったこと
- ⑧この派遣に参加していなかったら絶対会うはずのないみんなに出会えて本当に最高でした！派遣に参加してよかったです！最高の思い出をありがとう。



大山 桜來

- ①さく
- ②群馬県支部
- ③高崎健康福祉大学高崎高等学校
- ④教師・日本赤十字に携わる仕事
- ⑤たくさんあります
- ⑥ありがとう
- ⑦加盟校での熱烈な歓迎
- ⑧最高の思い出をありがとう
みんなとの思い出が私の宝物です



中島 美咲

- ①みさきん
- ②群馬県
- ③群馬県立中央中等教育学校
- ④宇宙飛行士
素粒子研究者
- ⑤囲碁、ピアノ
- ⑥努力は夢中になれない
- ⑦現地の学校で友だちを作ったこと
- ⑧この研修を、このメンバーでできたことに本当に感謝しています。ありがとうございました！



石原 詩音

- ①しのん
- ②群馬県
- ③伊勢崎市立四ツ葉学園中等教育学校
- ④文章に関する仕事
- ⑤読書、音楽を聴くこと
- ⑥倫理は胸の中だけで育てなさい
- ⑦学校訪問での歓迎と交流
- ⑧すごく楽しくて、一生の思い出になりました。このメンバーでよかったです！



高橋 信博



- ① ばち
- ② 茨城県
- ③ 清真学園高等学校・中学校
- ④ 現状維持
- ⑤ 読書と国内旅行
- ⑥ 天命に安んじて人事を尽くす
- ⑦ 学校訪問とptomスクの見学
- ⑧ みなさんの成長を間近で見ることができたことは最大の幸福でした。

齋藤 有子



- ① こりん
- ② 栃木県
- ③ 栃木県立鹿沼東高等学校
- ④ 「推しの子分」になること
- ⑤ 推し活
- ⑥ 感じるな！考えろ!!
- ⑦ みんなの笑顔&なんちゃって日本語講座
- ⑧ この感動を忘れず、各県、そして日本代表として、人のためと郷土社会のため国家と世界のために尽くしてください。応援しています。

天宮 賢也



- ① あまみん
- ② 群馬県
- ③ 群馬県伊勢崎工業高等学校
- ④ 必要とされる存在でいる
- ⑤ ジョギング・料理・日曜大工
- ⑥ 宿命に耐え、運命に戯れ、使命に生きる。
- ⑦ 訪問先で人生初の代表者署名や主賓待遇を経験できたこと。物語の主人公みたい。
- ⑧ 皆さんに会えたこと、各々が貴重な経験を積めたこと。ラッキーの連続でした。皆さんの将来が楽しみです！

榎原 康弘



- ① 課長（カッチョー）
- ② 群馬県支部
- ③ 日本赤十字社群馬県支部
- ④ 現状維持と成長
- ⑤ 公園めぐり、1年前から始めたピアノ
80年代から2000年代頃の洋楽
- ⑥ ありがとう
- ⑦ ひとつひとつの訪問のあたたかさ、ひとつひとつの食事のおいしさ
- ⑧ 青少年赤十字に出会ってくれて、ありがとう！

境野 雄気



- ① さーさん
- ② 群馬県
- ③ 日本赤十字社群馬県支部
- ④ 自分子どもたちと飲み交わすこと
- ⑤ 映画鑑賞（マーベルヒーロー）
- ⑥ 艱難汝を玉にす
- ⑦ 発表と交流のときの堂々とした姿
- ⑧ この事業に参加してくれてありがとう！

金子 早耶香



- ① さーやん
- ② 群馬県
- ③ 前橋赤十字病院
- ④ クルーズ旅行
- ⑤ ソフトテニス、ポッドキャスト
- ⑥ 思い立ったが吉日
- ⑦ メンバーの交流時の笑顔
- ⑧ 普段の生活では経験できないことばかりでこの経験を今後の活動に生かして頑張ってください。私もとてもいい経験となりました。ありがとうございました。

行程日誌

7月21日（金曜日）

天候

晴れ

記載者

中島 美咲

日	程
13:30	ホテルマイステイズプレミア成田集合
14:00	出発式
14:15	発表・交流 準備・練習
18:00	夕食
19:00	
19:20	ミーティング
21:00	発表・交流 準備・練習 各部屋へ移動 →就寝

所感



6月の事前研修会を経て、久しぶりに集まったメンバーだったが、すぐに緊張もほぐれ、6月を超えるようなチームワークが生まれた。各支部で用意してきた発表や交流を、みんなで話し合いながらより良いものとする事ができて良かった。



また、ポニョの歌やジャンボリミッキーのダンス、折り紙など、みんなが楽しめるよう試行錯誤を重ねることができた。

明日からいよいよマレーシアでの研修なので、持ち前のチームワークを活かして絶対に成功させたい。



行程日誌	7月22日（月曜日）	天候	晴れ	記載者	坂本 彩葉
------	------------	----	----	-----	-------

日		程	
7:15	ホテル出発	21:30	スイスガーデン ホテル ブキット ビントラン (SWISS-GARDEN HOTEL BUKIT BINTANG) 到着
7:40	成田空港 到着		
8:30	自由時間		
9:50	搭乗開始	21:50	ミーティング
11:15	成田空港発 (MH089) (所要時間: 7時間30分)	22:00	解散
12:20	昼食 (機内食)		
17:25	クアラルンプール国際空港 到着 ・現地ガイドと合流		
18:55	クアラルンプール国際空港 出発 (バス)		
19:50	レストランで夕食(スチームボート)		

所感

搭乗前はとても緊張していたが、メンバーの普段と変わらない空気感のおかげで初めての飛行機は楽しむことができた。

マレーシアの気候は日本よりは暑くなかったが、紫外線がとても強かった。また、現地の土が

赤土であったり、様々な言語表記の看板を見つけたり、初日から多くの異文化を体感することができてとても面白かった。

さらに、夕食のスチームボートはおでんに似ている料理でとても美味しかった。



行程日誌

7月23日（火曜日）

天候

晴れ

記載者

渡辺 璃虹

日		程	
8:30	ホテル出発	16:50	Royal Selangor Head office & Visitor Center 到着
9:00	マレーシア赤新月社（MRC）到着 ・施設説明、活動紹介 ・日本のプレゼンテーション		・ピューター工房見学
12:30	バス移動 ランチ（ヤムチャ料理）	18:10	Batu Cave 到着・見学
14:00	International Federation of Red Cross and Red Crescent Societies (IFRC) 到着 三亀恭子さんからお話、プレゼンテーション 交流発表、施設見学	19:15	ディナー（インド料理）
16:30	バス移動	20:35	市内視察 ペトロナスツインタワー（スーパーマーケット）
		22:00	ホテル 到着
		22:20	ミーティング 就寝

所感



MRC と日本赤十字社の違いを感じた。特に、医療体制において、MRC では医療の行き届いていない村などに病人やけが人が出たときに駆けつける緊急車両があることに違いを感じた。環境や気候が違うからこそその形なのだと思う。また、MRC が災害時のために、日本の自衛隊のような厳しい訓練を行っていることに驚いた。形は少し異なっているけど、日本もマレーシアも「奉仕」「健康・安全」という目標に向かって活動していることに感動した。

IFRC では日本人女性の三亀恭子さんからのお話が心に残っている。海外で活躍される恭子



さんに IFRC の幅広い活動やそれらに対する思いを伺い、とても勉強になった。また、YOUTH という 18 歳から 30 歳の若者に先行投資として注目しているという話が特に印象に残っている。赤十字活動を次へと繋げていくために大切なことなのだと感じた。1 日を通して、マレーシアと日本は、違う環境・宗教・文化なので、相手ヘリスベクトの気持ちを持ち、理解しようとする姿勢が大切だと気付いた。互いに思いやりの気持ちをもって接していきたいと思った。



行程日誌	7月24日（水曜日）	天候	晴れ	記載者	石原 詩音
------	------------	----	----	-----	-------

日		程	
9：15	ホテル 出発	18：30	セントラルマーケット 到着
9：30	KLINIK AMAL PERCUMA KUALA LUMPUR（現地赤十字施設） 到着・視察		・視察 ・ショッピング
12：20	現地赤十字施設 出発	19：20	夕食（西洋料理）
12：40	昼食（ニョニャ料理）	20：40	ホテル 到着
14：00	Technical institute of Kuala Lumpur-SMK Teknik Kuala Lumpur（赤新月加盟校） 到着		
	・歓迎のパフォーマンス ・活動紹介 ・レクリエーション、交流		
17：30	赤新月加盟校 出発		

所感

赤十字施設の病院は日本とは大きく異なる点が沢山あり、印象に残っている。まず、医療制度に関しては救急車が一部有料、反対に手術費が無料であるなど日本と自己負担するものが異なっていることに驚いた。次に医療設備についてだ。病院内に礼拝室が設置されているなど宗教的配慮が多く、日本でもボランティアなどで活かしていきたいと感じた。

学校訪問もとても貴重な経験となった。特に印

象的だったのは歓迎のパフォーマンスである。衣装や踊り、贈り物など私たちのために準備してくれたということにとっても感動した。また、訪問全体で感じたことはコミュニケーションの楽しさである。言語の違いという厚い壁がありながらも相手のことを考えて話すということは、難しくもあたたかいことだと感じた。他にも日本だけでは得られなかった気づきなどが沢山あり、貴重な経験となった。



行程日誌

7月25日（木曜日）

天候

晴れ

記載者

小林 未生

日		程	
7:45	集合	15:00	プトラモスク 到着・見学
8:00	ホテル出発		プトラジャヤ (Putrajaya) 市内クルーズ
8:30	Kajang High School-SMK Tinggi Kajang (赤新月加盟校) 到着	17:30	三井アウトレットパーク 到着 (ショッピング)
	・歓迎のパフォーマンス	19:00	空港 到着
	・日本メンバーによる発表	19:30	空港のレストランで夕食 (マレー料理)
	・現地の生徒たちによる学校・伝統 芸能・活動の紹介	21:00	自由時間 (ショッピング)
	・お土産交換	23:50	クアラルンプール国際空港発 (MH088) (所要時間: 7時間15分)
	・学校見学		
	・現地の生徒たちと交流		
	・ティータイム		
13:00	赤新月加盟校 出発		
13:30	レストランで昼食 (中華料理)		

所感



今日は、最初に現地の学校を訪問した。生徒たちの様々な歓迎がとても素晴らしく、感動した。それぞれの文化の踊りや衣装、演奏の発表、伝統文化の体験を楽しむことができた。また、日本メンバーの発表での、栃木県メンバーのハプニングへの対応も素晴らしかった。スライドの調整中、即興で日本語を教えたりクイズを出したりしていた栃木県メンバーは堂々としていて、感銘を受けた。自由な交流の時間に、現地の生徒たちは私達に積極的に話しかけてくれた。一緒に写真を撮ったり SNS のアカウントを交換したりしたメンバーもいるので、日本に帰っても交流が続くとい

いなと思った。

プトラモスクでは、イスラム教における神聖な場所ならではのルールやマナーを感じることができた。実際に、モスクに入るときには、靴を脱いだり、女性は肌や髪を隠すためのローブを着たりした。

また、お世話になった現地ガイドのタイさんとお別れ会として、一緒に夕食を食べた。マレーシアに関する様々な会話ができる。

マレーシア滞在最終日、少し寂しく感じながらも楽しく過ごすことができた。



行程日誌	7月26日（金曜日）	天候	晴れ	記事者	中谷 心海
------	------------	----	----	-----	-------

日 程	
	飛行機内
4:50	朝食（機内）
8:10	帰国
9:00	解散式 団員振り返り（成長したと思うところ） 天宮賢也団長からのお話 大山咲来リーダーからのお話 金子早耶香看護師からのお話 各県先生方からのお話 群馬県支部榎原康弘課長、境野雄気さんからのお話 事後研修について
9:20	JTB添乗員功刀さんお別れ式
9:25	解散

所感

今日は海外派遣の最終日で飛行機から降り入国手続きをするとき、以前よりもスムーズにできていた。また預け荷物を探るとき自分のだけでなくほかの団員のスーツケースも探してとってくれたところが素晴らしいと思った。解散式の時、私が成長したと思うところを2つ発表した。内容は周りをよく見て行動できるようになったことと、英語での会話が少し上達したことである。団長やリーダー、金子さん、先生方、県支部の方からの話を聞いたとき、6日間ハードなスケジュールの中、学校訪問で異なる文化をもつ学生と交流し、現地の方の温かさに触れることができ、改めてマ

レーシアの派遣団員に選ばれマレーシアへ行くことができよかったと思った。

JTB 添乗員の功刀さんは入国手続きなどを優しく教えてくださった。功刀さんとお別れをするのがとてもつらかったけれど最後にみんなで写真を撮ることができてうれしかった。

このマレーシア研修で学んだ、海外の方と言葉が違っていても会話ができて友好関係を築けること、マレーシアでは文化や宗教が違うなか、互いが尊重して生活をしているということをお忘れず、今後の生活や JRC の活動に役立てたい。



公式訪問記録

訪問先名称：

赤新月社表敬訪問

視察日時：7月23日（火）9時00分～12時25分

記録者：佐藤・岡川

訪問先対応者：事務総長 Danielさん
 赤新月社職員 Mimieさん、Doniさん、Aidaさん、Iscanaさん、Kimさん、
 Carrotさん、Alipさん
 ユースリーダー Michelleさん

〈内 容〉

1. 赤新月社の説明
2. 赤新月社の加盟人数、活動内容の説明
3. 各県の発表（JRCが行っていること、日本の文化、日本の学校について）
4. 赤新月社のメンバーとユースのメンバーからの活動報告
5. マレーシアで使われている救急車の見学
6. 公式記念品贈与



〈発 見〉

赤新月社を訪問して新たに2点のことに気づいた。1点目としてMRCではPFAC (psychological first aid course) が重視されていて、アクティビティを活用したメンタルヘルスを行うことが被災者や年配の方の精神的不安を和らげることができるという点だ。またその他にも災害時に民間人の捜索や救助健康保持のために様々な訓練を行っていて、どれもがとてもきついものだった。これらは日本の実践目標である「健康・安全」の部分で日本でも取り入れるべきであると思った。

2点目は日本とは異なる活動や、活動幅、活動スタイルの違いが多く見られた点である。赤新月社やユースは国外で活動したり、他国との関わりが深く、赤新月社とユース間でしっかり情報が回っていたりしていた。日本は活動内容の情報は入ってきていても役員や研修に参加した人たちにとどまってしまうたり関東の活動内容は入ってきていても遠い県の活動内容を知る機会が少ないので、情報があまり回っていないという問題点を見つけた。

さらに赤新月社では若者向けの斬新な発表スタイルがあって、楽しく目に止まる活動報告をしていた。日本も堅い活動報告をするのではなく、どうやったらたくさんの人から注目を集められる活動報告ができるのか、誰もがわかりやすく明確な情報を伝えられるのかを考えていく必要があると思った。

ユースが若者目線で引っ張って行っているのを見て、私たちJRCが活動、発表の仕方を考えて、実行することが今後の課題だと気づいた。



公式訪問記録

訪問先名称：

IFRCアジア太洋州事務所

視察日時： 7月23日（火） 14時00分～16時30分

記録者： 池澤・田川

訪問先対応者： 事務局長 Kim Jujaさん

アジア大洋州地域ユース担当 三亀恭子さん

〈内容〉

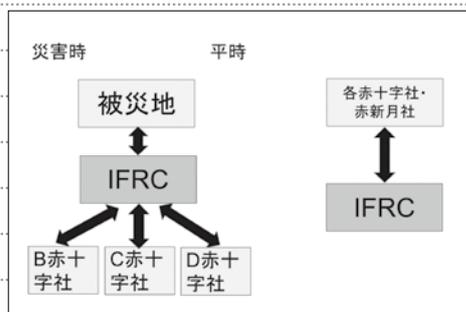
1. 支部長挨拶 (Kim Jujaさん)
2. 写真撮影
3. 北関東三県支部団長あいさつ (天宮賢也先生)
4. 北関東三県支部リーダー挨拶 (大山桜来さん)
5. JRC発表&交流
6. IFRCについて (三亀恭子さん)
7. 社内見学



〈発見〉

★IFRCとは 赤十字社と赤新月社が力を合わせて世界をより良くするために活動するグループだと言ったことがわかった。災害時には、被災国と支援国の間に立ち、指導や提案をしている。仕組みは〔表1〕参照。災害時以外には、各赤十字・赤新月社をより良くするために、意見の反映や様々な対策を行っている。

★ユースとは 18～30歳の人。①脆弱なコミュニティのユース②ボランティアとしてのユース③リーダーとしてのユースである。ユースそれぞれの違いは自分で選択や参加を決定できるかできないかである。IFRCがユースをターゲットにしている理由は、将来ずっと、IFRCやボランティアを続けるためである。ユースはリーダーになることができる。三亀さんは声が届く仕組みづくりを目指し、最終的にすべての子どもを笑顔にしたいと言っていた。また、Kim事務局長の、『マレーシアだけでなく、世界を回って勉強すべき』だというアドバイスを受け、今回のマレーシア派遣事業の大切さを痛感するとともに、これからも世界に視野を向け続けて日本赤十字の活動に参考になることを見つけたいと思った。



〔表1〕



公式訪問記録

訪問先名称： **Technical institute of Kuala Lumpur
- SMK Teknik Kuala Lumpur**

視察日時： 7月24日（水） 14時00分～17時30分 記録者： 大金・横山

訪問先応対者： 校長 Ahmad Nzryshah Bin Mohamed Khalidさん
先生、生徒、赤新月社、IFRC、ユースボランティア合わせて約100人

〈内 容〉

1. 両国の国歌斉唱
2. 祈りの朗読
3. 挨拶（校長、団長、リーダー）
4. 記念品交換
5. 現地生徒による伝統ダンス「ジョゲク・ランバク」披露
6. 派遣メンバーによる発表・交流企画
7. 軽食を兼ねたトーク交流



〈詳 細〉

交流場所の体育館までは「コンパン」を用いたダンスで私達を先導してくれた。各県の発表では、生徒達が想像を超える盛り上がりを見せていた。私達の歌唱の際には手拍子だけではなく、振り付けも真似をしてくれて嬉しかった。他にも、一緒にダンスをするなどして楽しい時間を過ごした。メンバーの一人ひとりが現地の生徒と英語で会話をしたり、写真を撮ったりするなどして、様々な形で交流をした。学校を出る際には、訪問校の生徒たちが最後まで笑顔で手を振って見送ってくれた。

〈発 見〉

学校の方々の積極性や異文化が共存する国ならではのコミュニケーション術を肌身で感じ、日本の学校では味わえない新たな刺激を得る事ができた。特に現地の人々とのフリータイムでは自分が笑顔であると相手も笑顔になることに気づき、人との関わりではこのような点を意識していく事が大切だと認識した。

今回訪問した学校の生徒たちにとって私たち派遣メンバーは対面した初めての外国人であったと伺った。交換したInstagramアカウントでのやりとりなどを通じてこれからも日本の文化を教えたり何気ない会話を繰り返し広げたりと関係を深めたい。そして現地の方々に感謝の意を還元していきたい。



公式訪問記録

訪問先名称：

KLINIK AMAL PERCUMA

視察日時： 7月24日（水） 9時30分～12時20分

記録者： 関・松下

訪問先対応者： クリニックアシスタント Hafldzさん
医師 Khomahthyさん
マーケティング Rukakさん

〈内 容〉

1. 医師の方による事業紹介
2. 動画視聴
3. スタッフの方による提供サービスの説明
4. 施設見学
5. 記念品の贈呈
6. 記念撮影



〈発 見〉

今回訪問したのは、透析と心臓治療を提供している施設だ。朝9時から深夜1時まで、いつでも患者さんの診断ができる体制を整えている。この施設は寄付金で運営されていて、企業や市民からの寄付が財源となっているようだ。

施設の方のお話の中で、マレーシアでは心臓発作と糖尿病で亡くなる人が多いということが印象に残った。これは、マレーシアの食習慣に見られるナシ・ゴレンなど油の多い食事がたくさんあり、マレーシアの平均寿命が日本よりも短いことにも影響している。日本では食生活についてアドバイスをする専門の方がいるが、今回訪問した施設では、医師の方が心臓発作で治療を受けた人に健康面でさまざまなアドバイスをしているようだ。また、お酒を飲みすぎてしまう人に対しては、1日に飲むお酒の本数を徐々に少なくしていく、1週間に飲むお酒の本数を決めるなど、具体的な目標を提示して人々の健康増進を図っている。

さらに、施設の中にはイスラム教の患者さんのために礼拝室が設けられており、断食の時期に合わせた配慮など、マレーシアの多民族国家ならではの文化的配慮が感じられた。

今回の訪問を通して、マレーシアの医療形態について多くの知識を得ることができた。日本との相違点もさまざまなところで垣間見えたので興味深かった。



公式訪問記録

訪問先名称： **Kajang High School - SMK Tinagi Kajang**

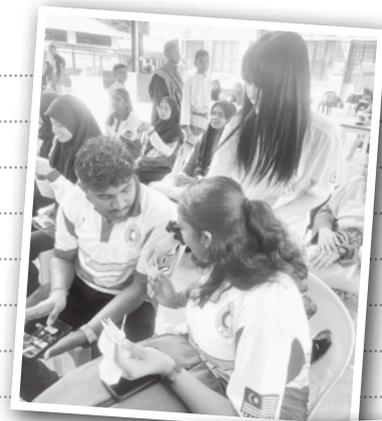
視察日時： 7月25日（木） 8時30分～13時00分

記録者： 大金・田川

訪問先応対者： 校長 Mohd Fauzi bin Abu Bakarさん
先生、生徒、赤新月社、IFRC、ユースボランティア合わせて約100人

〈内 容〉

1. 礼拝の言葉
2. 校長、団長、リーダーあいさつ
3. 調印式
4. JRCの発表（群馬・栃木）
5. 記念品交換
6. 植樹式
7. 軽食
8. 訪問校による赤新月社の紹介、伝統的な踊りの披露
9. JRCの発表（茨城）、交流企画（ダンス、歌、おりがみ）
10. マレーシアの文化体験



〈発 見〉

今回訪れた学校は男子校である。写真では女性もたくさんいるように見えるが、これは今回私達のために特別に他校から来てくれたからだそうだ。

バスを降りると多くの人々が出迎えてくれた。交流会場までは、民族衣装を着た生徒が踊りや太鼓を披露してくれたので、様々な民族の伝統的なパフォーマンスを知ることができた。その後、ココナッツの木の植樹を行い、私たちにとって新鮮な活動をすることができた。軽食の後には、訪問校の生徒から赤新月社の活動や救急法の説明を受けた。



また、各ブースに分かれて文化の説明も手厚く行ってくれた。特に書道では現地の生徒がアラビア語で自分の名前を書いてくれたのだが、筆は木でできていて、明朝体のように縦に太く、横は細くなっており、木の筆でしか成立しないような字体が印象的であった。現在では使われておらず、授業でしか習わないような字だが、現在のアラビア語と何が違うのか、また同じであればどうして習わなくなったのかを知りたい。

学校訪問での交流は、互いを知り、理解するためにとっても良い機会であり、体験を通してマレーシアの文化を知り日本文化との共通点や相違点を発見することができた。

自由研究

多民族国家から学ぶ異文化共存

茨城県立緑岡高等学校 2年 大金 温志

〈動機〉

日本は少子高齢化社会であり、労働者不足が深刻になっている。そして、日本は労働者を補うために、外国人労働者の受け入れを進めており、今後ますます様々な国籍や人種が暮らす国になってゆくと考えられる。そこで、多民族国家であるマレーシアで、人々の関わり方や社会的な取り組みを知り、日本で異文化の共存を実現するために必要なことを見つける。

〈調査方法〉

- 1 書籍をはじめ、様々なメディアで情報を収集
- 2 現地での視察や聞き取り調査
- 3 集めた情報をもとに現在の日本と見比べ、異文化共存の実現に必要なことを考える

〈調査結果・考察〉

マレーシアの民族は、マレー系が最も多く、他は中華系、インド系である。言語は、マレー語が公用語であり、中国語、タミール語、英語が話されている。宗教は、イスラム教が最も多く、仏教、キリスト教、ヒンドゥー教などがある。このように、マレーシアは、様々な民族が暮らしており、言語や宗教が混在する国である。では、どのようにして彼らは共存をしているのか。また、日本で異文化共存を実現するにはどうすればいいのだろうか。

まず1つ目に、「互いを尊重する」ということである。現地のガイドからマレーシア人は食事をする際に、もしイスラム教の人がいたとしたら、お酒を飲まないようにするといった気遣いをしていて教えてもらった。これは異文化共存を実現するために重要なことだと思う。しかし、日本では宗教が身近でないため、多くの人が宗教に関する知識が身につけていない。知識がなければ、もちろん気遣いはできない。日本人が異文化共存の一步を踏み出すには、宗教などの文化を知ることが必要となってくる。

2つ目に、教育である。日本は外国人の受け入れをすすめているが治安悪化、日本人の雇用への影響が懸念されている。マ



レーシアは移民労働者の受け入れを積極的に行っている。赤新月の施設を訪問した際に、活動として、移民に法律や職の制限についてを教える講習を開いていると紹介された。日本も行政あるいは団体がルールなどを教える機会を作るなどし、日本社会を守ることが大切である。

3つ目は、社会に求められる設備や取り組みである。今回の派遣で様々な施設を訪れ、日本にはないものをいくつか発見した。例えば病院を訪れた際に、お祈りをする部屋が完備されていて、学校ではお祈りをする時間があった。このような慣習がない日本では、宗教的な設備の完備や宗教行為に対する各々の理解が求められる。

〈今後の展望〉

マレーシアには、マレー系の民族が経済的に弱く、民族間での貧富の差を解消するプンプトラ政策が実施されている。この政策に対するそれぞれの民族の考え方や、社会への影響を調べ、政治的・経済的な視点からも異文化共存について研究する必要があると感じた。

〈感想〉

これからの日本はどのように変化するのかは分からない。外国人労働者の受け入れを望む人もいれば、反対する人がいるのも事実だ。しかし、インバウンドが増す現代で、以前よりも異文化を理解することが重要になっていることは明白だ。互いの文化を理解し合うことが共存の一步になることは、研究を通して強く実感した。



自由研究

マレーシアの伝統芸能について

茨城高等学校 2年 小林 末生

・目的、動機

派遣メンバーのスライド発表で、茨城県メンバーは「日本の伝統文化」について発表した。私が担当した題材は日本の書道についてだった。このようなことがあり、マレーシアにはどのような伝統芸能があるのか知りたいと思った。伝統芸能として、主に文字、楽器、歌、踊りを日本のものとマレーシアのものを比較する。また、どのように継承されているか、継承の現状などについても調べる。

・研究方法

- ・ 現地視察
- ・ 聞き取り調査
- ・ 本・インターネットで調査する

・研究結果

この自由研究の主な資料となるものは、現地の学校との交流会を行ったときに現地の生徒たちが私達を歓迎するための踊りや音楽、伝統文化の紹介・体験である。その中で私が特に気になったものについてまとめる。

〈書道〉

現地の学校で実際に体験することができた。現地の生徒が竹でできた筆とインクを使い、私の名前をアラビア語がもととなっているであろう文字で書いてくれた。その筆とインクは、日本で使われているような小筆や墨とよく似ていた。話を聞くと、この文字はイスラームの授業で習うことがあるようだ。しかし、それほど多く習ったり使ったりするわけではないようだ。



〈踊り〉

現地の生徒たちの踊りのパフォーマンスは、全体的に見ると、宗教によって分かれている、とい

う感じであった。マレー系、中華系、インド系などにより衣装や踊り方などで違いが見受けられた。



〈楽器・音楽〉

訪問した2校が私達の歓迎として、はじめに行ったパフォーマンスはコンパン (Kompang) という伝統的な楽器が共通して使われていた。大人数により鳴り響く、そろったコンパンの甲高い音。このパフォーマンスは私たちに力強い印象を与える、迫力あるものだった。コンパンは、直径20～30センチの片面太鼓で、木製の浅いフレームの片側に雌ヤギの皮でできた面が張られている。演奏の仕方としては、左手で太鼓を持ち、右手で面を叩くといった感じである。主にイスラーム教の詩の朗唱や歌の伴奏などに使われる。結婚式やイスラームの宗教行事、公の催しでよく使われる楽器のため、課外活動として生徒に教える学校も多くあるようだ。



・まとめ、考察、感想

マレーシアでは信教の自由が認められていて、宗教を信仰する人が多い。それぞれの宗教により、伝統芸能に違いが見られた。私は宗教が根付いているからこそ、継承が続いているようなものが多いのではないかと考えた。また、現地の学校ではそれぞれの文化を尊重し合っているということも感じることができた。

日本と比較して、継承の面で宗教の有無がかなり関わっていると考えた。

日本の伝統文化を大切にして、継承していくといったことについて、考え直す良い機会になったと感じた。

自由研究

マレーシアの災害救助から日本が学べること

茨城高等学校 2年 田川 京華

目的：2021年に起きたマレーシア大洪水において赤新月社の方々がすべての人を平等に助けていた姿に感銘を受けた。そこで、①マレーシアでは発災後速やかな避難所の設置や運営のためにどのような備えをしているのかを学ぶ。また、②外国人労働者が増加している日本においてもすべての避難者が安心して過ごせる避難所の環境について知る。①及び②を日本に反映できることについて考察する。

研究方法：インタビュー・現地の方の発表

研究結果：マレーシアでは迅速な避難救助のため、特に移民へのマレーシアの街を知ってもらうプログラムを実施している。またそこでは災害が起こったときの避難の仕方、AEDや人工呼吸の使い方、ロープを使った避難の講習を行っている。言語の壁を越え、文化のずれ違いを避けるためにも交流会などを通して友好関係を作ることが大事であるとマレーシア赤新月社の方が仰っていた。また、災害が起こったときは、避難所のリーダー（その場のリーダーやIFRC本部など）を決めることで連絡がスムーズになるようにしている。加えて、マレーシア赤新月社ではメンタルヘルスケアにも力を入れているようで、災害で家を失うなどストレスがたまり発散ができない環境ではMHPSS（精神保健及び心理社会支援）が重要な役割を果たしている。

考察：まず①について、日本では防災マップが各地方自治体ごとに異なっているが、人口に対する外国人割合が大きい東京都でさえ英語表記は少なかった。マレーシアよりも他言語に対する壁が高い日本だからこそ事前に災害に関わることがらはなるべく多くの言語で説明したほうが、災害になった際に確実に意思疎通にかかる時間の減少につながると考えられる。また、②について、日本赤十字社では『災害時のこころケア活動』としてMHPSSと類似した活動を行っているが、一般的にその活動は広く知られていない。そこで、日本でも、『災害時のこころケア活動』に今一度力をそそぐ必要があり、SNSやホームページを通して多くの人に知られる機会を作った上で、安心して簡単に利用できる環境があると認知される必要がある。今回はマレーシア赤新月社の災害についての対応について多くのことを知ることができた。しかし、まだ学びきれていないこともあると思う。これからも知見を広げ、考察し、行動に移していきたい。



自由研究

マレーシアにおける JRC の活動

清真学園高等学校・中学校 2年（高校） 坂本 彩葉

この研究の目的は他国の同世代の人たちのボランティア活動を知り、彼らの活動から所属している部活の発展に活かせる点を見つけることである。また、現地で赤新月社の方の話を聞いたり、現地のJRCメンバーに直接質問をしてこの研究を進めた。

結果として、彼らの活動は日本よりも規模が大きく、赤新月社と密接に関わっていた。活動内容は、主に2つある。

1つ目は、集会だ。校内のメンバーとは週に1回、全国のメンバーとは年に数回ほど集会を開いていて、コロナ禍でもオンライン上で活動を続けていた。集会では本部からボランティアの要請を受けたり、自分たちでマレーシアの課題について話し合っている。

2つ目は、赤新月社が展開するプログラムへの参加だ。ジュニアメンバー（基本的に10歳から12歳）とカデットメンバー（基本的に13歳から17歳）はこれらのプログラムを終えるとバッジを手に入れることができ、実際にボランティアや生活に活かすことが可能になる。例えば、赤十字・赤新月社の知識や基本的な応急手当の方法などの必ず受講しなければならないプログラムの他に災害訓練やキャンプ事業などを選択して受講するものもあり、ジュニアメンバーは最大7つ、カデットメンバーは最大9つのバッジを取得することができる。さらにジュニアメンバーは5つ以上、

カデットメンバーは6つ以上取得すると特別なバッジを授与され、手に入れたバッジはユニフォームに付けることができる。

また本部から要請があれば、避難施設で被災者のメンタルケアやSSKという移民の子どもたちを対象とした人道支援にも参加している。彼らは人道支援に力を入れていて、その活動の内容はとても充実している。

そして18歳以上の若者はいくつかの分野に焦点を当てて活動している。例えば、若者が意思決定に関与できるようにあらゆるレベルで若者主導の構造を確立したり、気候変動やメンタルヘルス、交通安全などのプロジェクトに参加し、意識を高めることを目的としている。さらに彼らはマレーシアスカウト協会やマレーシア消防団隊など同様の組織の1つであり、日本のJRC部とはまた違う団体である。

彼らはどんなに小さな問題であっても話し合っている。これらを踏まえて、所属する部活でも定期的に集会を開いて活動の幅を広げていきたいと考えた。また、この研究によって浮かんだ疑問やまとめきれなかった情報も部員や周囲の人たちに共有していきたいと思った。



自由研究

マレーシアの災害対応

常総学院高等学校 2年 関 健佑

●研究の動機

日本とは違い多民族国家であるマレーシアで、災害への対応を円滑に進めるためにどのような取り組みが行われているのかを知りたいと思ったから。

●研究方法

現地視察 聞き取り調査

●調査結果

災害救援・災害対策を行なっているマレーシア赤新月社の方々に、以下の2つの質問をした。

①質問：多民族国家であり、多くの移民を受け入れているマレーシアで、災害への対応を円滑に進めるためにどのような工夫をしているのですか？

回答：移民の方に、地震などの自然災害が発生した際に街なかに潜む危険を知ってもらうプログラムを実施しています。また、災害が起こったときの避難の仕方を教えています。

②質問：避難所を開設するときにはどのような工夫をしているのですか？

回答：避難所のリーダーを決めて、政府や自治体と連携して正しい情報を避難者に伝えるようにしています。

●考察

マレーシアは多民族国家であり、他地域からの移民も多く生活しているため、人々の地震や洪水などの自然災害に対する知識や考え方はさまざま



である。特に移民に関して言えば、マレーシアについてあまり知らない人がほとんどだ。そのため、①のような取り組みは、街の特徴などをあらかじめ伝えておくことで人々の防災意識を高めるとともに、多くの人の命を守ることにもつながるのではないかと考える。

また、マレーシア赤新月社は、州によって民族比率が異なるという国家の特徴に合わせる形で州ごとに現地の人からなるボランティアグループを持っており、言語や文化の違いに対応できる体制を整えている。災害への対応を円滑に進めるための、多民族国家であるマレーシアならではの工夫だと思った。

しかし、実際に地震や洪水などの自然災害が発生すると、人々の間で混乱が生じ、慣れない環境での生活を余儀なくされることも多い。そこで、避難所の開設時に②のような工夫をすることにより、政府や自治体が避難所の状況を把握して素早い支援を行えるようにするとともに、偽情報が出回りやすい災害時に正しい情報を避難者に伝えられるのではないかと感じた。

●感想

マレーシアの災害対応について調べてみて、言語や文化の違いを超えて助け合うための多彩な仕組みが構築されていることに驚いた。地域の実情に合わせた手厚い支援を行うという点は、日本における災害対応でも活かせるのではないかと感じた。

自由研究

マレーシアにおける持続可能な観光産業について

栃木県立鹿沼東高等学校 2年 岡川 航士

○研究理由

まちづくりや都市と自然が融合したマレーシアの首都でのエコツーリズムについて理解を深め、自分の住む町に活かせることを考えるきっかけとするため。

○研究方法

- ・宇都宮市とマレーシアが抱えている環境及び観光の課題について調べて、解決に向けてどのような取り組みを行っているかを考察する。
- ・現地を視察して、調べた課題以外にも考えられるものを見つける。
- ・実際に現地の通訳の方やガイドの方に課題解決に向けて行っていることを聞く

○結果

マレーシア（クアラルンプール）について
主な観光資源

- ・モスクやイスラム美術館などの宗教的観光産業
- ・ペトロナス・ツインタワーやKLタワーなどの華やかな都会の景観
- ・チャイナタウンやコリアンタウンなどの多文化が入り混じる街並み

課題

- ・ヘイズや排気ガスによる大気汚染
- ・インバウンド効果による観光客の迷惑行為
- ・観光ガイド不足

研究結果・考察

クアラルンプール市内には、自分の想像をはるかに上回る高い高層ビルが多くあったため、近代的な都市であると感じた。また、スズ工場やプラモスクなど、伝統的な観光地からは、クアラルンプールの歴史を感じることができたので、非常にいい機会となった。

エコツーリズムの観点からも参考になる点があ

った。クアラルンプールではツインタワーやKLタワーのような近代的な観光産業以外にも、少し離れたところにはプトラジャヤ湖やバドゥー洞窟のような自然を最大限活かした観光産業も見られた。宇都宮市では見られないような景観を見ることができたので、非常に参考になった。

現在宇都宮市では、特定の観光産業への依存が課題となっている。その課題を解決していくためには、クアラルンプールのように様々なジャンルの観光資源を発信していくことが大切になっていくと思う。

宇都宮市とクアラルンプールでは、どちらも環境についての課題があることが分かった。いずれも都市部の観光地での光害や大気汚染などが課題となっている。この課題を解決していくためには、両都市が、それぞれの都市の発展のために連携していくことが大切になってくると思う。

感想

この研究を通して、これまでなかなか考えることなかった観光の問題について深く考えることができたので、自分自身の知見がとても広がった。また、自分の住む街と今まで遠くの存在と考えていた外国の都市の比較を行ったことで、宇都宮のさらなる発展に貢献できるようになりたいと強く思うことができたので、とても良い機会となった。



自由研究

多文化共生での国のマナーとルール

栃木県立小山西高等学校 中谷 心海

動機

日本で食事や挨拶のマナーがあるが、多文化社会のマレーシアでは民族や宗教の違う様々な人々がどのようなルールを作って生活をしているのか自分の目で確認したいと思った。また海外の方と関わる際に文化や価値観の違いを理解し、JRCメンバーに伝えることで誤解や偏見のない共生社会を目指す。

研究方法

インターネット、現地視察、アンケート

研究結果

・食事のマナー

左手は不浄な手とされているので握手や食事、ものを渡すときは右手を使う。料理は大皿に盛られ、各自が自分の取り皿に取り分け専用のスプーンやフォークで分けて食べる。食事は楽しむものなので、ゆっくり食べる。食事中にアルコールを飲むことは特にイスラム教徒の間で禁止されている。食事中に脚を組むことは無礼とされている。食事中は政治や宗教などのデリケートな話題は避ける。

・公共の場でのマナーとルール

宗教的な場所を訪れる際は肩やひざを隠す服装が好まれる。プトラモスクを訪れた際イスラム教では女性は髪や肌の露出が



禁じられているので、ローブを着用しないと中に入ることができなかった。儀式や祈りの最中の写真撮影は避ける。イスラム教徒の女性に対して挨拶をするときは相手から手を差し出されない限り握手を避ける。人差し指は動物を指す



すときのみを使うので、人を指すときは親指を使うか全手で指す。ごみのポイ捨ては厳禁。

・交通のマナーとルール

免許は満18歳から取得でき、自動車は左側通行など基本の交通ルールは日本と同じ。高速道路を利用する場合、自動車は有料だが、バイクは無料。

・学校でのマナーと校則とルール

学校の制服でスポーツをすることは禁止。寮に泊まる場合、いくつかの科目の単位を取らなければいけない。スマートフォンの持ち込み禁止。派手な髪型は禁止で短くてきちんとした髪型にする。足首を覆う服を着る。宗教に関するアクセサリーが許可されている。金曜日にイスラム教徒はコーランを朗読し、非イスラム教徒の人は他の部屋で勉強をする。

・気づいたこと

マレーシアでの食事のマナーは気を付けて生活をしていないとついやってしまうような動作が多いことが分かった。交通マナーなど日本のマナーやルールと似ているところもあれば、学校で宗教関係のアクセサリーをつけてもいい、足首が隠れる服を着るなど多文化社会であるマレーシアならではのマナーやルールがあり、互いの文化や宗教を尊重して生活をしていることが分かった。また、交通ルールや公共の場でのマナーでは基本のマナーやルールは日本と同じだが、赤信号を守らない車やスピードを守らない車、ごみを道に捨てている人を見かけ、マナーやルールを守らない人への罰も軽いと聞いたので、規範意識を高めていくことがマレーシアの課題のひとつなのではないかと考えた。

自由研究

マレーシアの環境と住まいの特色

栃木県立栃木女子高等学校 2年 渡辺 璃虹

・動機、目的

マレーシアは日本とは違い、熱帯雨林気候に属していて、どのように環境が異なるのかを知りたいと思ったため。また、気候が異なるということは、それに伴い、住まい、住宅のづくりも異なると考察し、住まいの工夫を学ぶため。

・研究方法

インターネット、現地の方へアンケート、現地視察

・研究結果

まず、マレーシアは、年平均気温が27～28℃で、基本的に雨季と乾季に分けられる。赤道に近いので1年を通して暑いという特徴をもっている。スコールもとても多い地域。

次に、現地の建物を実際に見て感じたことを2つ紹介する。1つ目は、コンクリートやタイル造りの建物が多いことだ。特に現地の学校はタイル造りが多かった。コンクリートやタイルは体温等の熱を一時的に吸収する性質を持っているため、湿度や気温が高い地域で少しでも涼しく感じることができる形式だと思う。また、日本で用いられている木材よりコンクリートは湿気を吸収しにくいため、腐食しにくい特長があり、高温多湿なマレーシアでは最適な建材だと考える。

2つ目はショップハウスの歩廊の形の特殊さだ。2階部分が出っ張っていて、1階が屋根付きの通りになっている。日本では逆に2階がベランダなどに使われることが多い。マレーシアがこのような歩廊の造りなのは、強い日差しと雨をしのぐため、法律で定められているようだ。

また、現地の方へ住まいと過ごし方についてのアンケートをとった。3つの質問に対して、特に日本にはないと感じた回答を抜粋して紹介する。

1つ目は暑い時にどのように涼しくしていますかという質問。そこにシェーディングエリアで休むという回答があった。これは部分的に大きな布で日陰を作った場所だそうだ。日本の街中を始め、学校などにもあまりない、涼しく感じるための工夫だと思った。

2つ目は伝統的な特殊な造りのある建物がありますかという質問。そこに家の通気口が特殊な住居があるという回答があった。写真を見せてもらえると、高床式に加え、家の至る所に通気口があった。

家の中の空気がよく回るようになっていて、大雨などの災害から守る工夫もされているのだなと感じた。

3つ目は家の造りにおいて特別なところはありませんかという質問。そこにマレー式の屋根とあった。カンボンハウスというもので瓦や茅で、屋根ができていた。2つ目と同様、通気性に特化していてより涼しく感じるための造りだと思った。

これらは全て伝統的な、環境に合わせた暮らしの工夫だと感じた。

・まとめ

実際に現地で見たり聞いたりすると、より情報や知識を深めることが出来た。日本とマレーシアは環境が異なるので住まいの形式も異なっていた。日本でも夏は異常な暑さが問題視されているので、マレーシアの住まいの工夫を取り入れてみるのも良いと思った。この研究を通して環境と住まいの結びつきを感じるとともに、伝統的な住まいに用いられている知恵なども大切にしたいと思った。



自由研究

マレーシアと日本における DX の違い

栃木県立真岡女子高等学校 2年 横山沙都美

・目的

アフターコロナの影響もあり、日本では非接触型の形式に揃えるためDX（デジタルトランスフォーメーション）の動きがここ数年で急激に加速している。海外に目を向け、いわゆる発展途上国であるマレーシアでも同じようにDXが進んでいるのかを実際に見て学び、共通点・相違点を考察する。

・研究方法

インターネット調査、現地調査（視察やインタビュー、アンケート）

・調査結果

まず、マレーシアでのデジタル技術の浸透具合を調査した。

「Which do you have?」（選択式複数回答可）

スマートフォン：100% タブレット：25%

パソコン：75%

どれも持っていない：0%

続いて「医療施設」

「学校生活」「街中」

という3つの観点よりマレーシアと日本の現状を比較した。

（以下、日本→J マレーシア→M）

* 医療施設

J：電子カルテ、オンライン診療・処方、アプリによるヘルスケア など

M：電子カルテ、健康管理アプリ「AIA+」（診療の予約、医師とのチャット、オンライン診療・処方、医薬品の配達、ヘルスチェック・マネジメントをひとつで）、コロナワクチン接種証明アプリ「My Sejahtera」

* 学校生活

J：1人1台タブレット、電子黒板・プロジェクター、Google classroom・Teams、出欠連絡フォーム など

M：タブレット、電子黒板・プロジェクター、

Google classroom、出欠連絡フォーム など（地域差がかなり大きい）

* 街中

J：電子オーダーシステム、案内・配膳ロボット、セルフレジ、電子決済、オンラインショッピング、フードデリバリー

M：電子オーダーシステム、セルフレジ、多機能アプリ「Grab」（電子決済、オンラインショッピング、フードデリバリー、タクシー配車をひとつで）



・研究結果、考察

マレーシアのデジタル技術は想像の域を遥かに超えた、日本に引けを取らない高水準だった。スマートフォンはごく一部を除く全ての国民が所持し、現地のスーパーや商業施設を訪れてみても日本のような見慣れたDXの光景が広がっているのは、日本企業が多く進出しているという事柄が関連しているのではと考える。

相違点としては、都市部とそれ以外によるデジタルデバイド（情報格差）の大幅な開きが挙げられる。特に「学校生活」では、コロナ禍にいち早くオンライン制度を導入し、その後も発展を続け世界から“最先端”と称される現場もあれば、未だに紙とペンのみのおソドックスな現場もある。マレーシアの学校運営は日本とは異なり多くの寄付のもと行われていて、その寄付の多くが都市部に集中している現状が一因だろう。現地の人々もこの負の側面を十分理解しているようで、マレーシアにおける今後の課題と言えそうだ。

・最後に

今回の研究を通して、日本は肯定的な視点から捉えると誰も置き去りにしない画一的なDX、否定的な視点から捉えると半ば押しつけ的なDXと表現することができる。対してマレーシアは企業やグループの垣根を超えたDXが機能的に進められているといった印象を受けた。

マレーシアを発展途上国と呼ぶのは時代遅れの考えなのかもしれないー



自由研究

マレーシアにおける多民族共存の現状と課題

星の杜高等学校 2年 松下さくら

・ 動機

マレーシアにおける多民族共存について興味があり、且つ、同国の現状と課題から得た知識が、日本の多民族・多文化共存に生かされるのではないかと考えた。

・ 研究方法

インターネットによる事前調査、現地聞き取り調査、現地でアンケート調査

・ 調査結果

マレーシアにはマレー系、中華系、インド系の主要な民族の他、少数民族も存在している。公用語は



マレー語と英語であり、家庭内では中国語で話し、友人とはマレー語や英語を使い分けるなど、状況に応じて言語を使い分けることが一般的である。食文化は、マレー料理、インド料理、中華料理、ニョニャ料理などが挙げられる。

また、多くの方がイスラム教徒のラマダンの断食明けを祝う「ハリ・ラヤ・アイディルフィトリ」が伝統行事に関する調査から挙げられた。

マレーシアの人々はどこで伝統文化を学ぶのか。これに対して、調査対象者全員が学校で学ぶと回答した。小学校の音楽の授業を通じて、民族楽器の使い方を学ぶ。イベントでは異なる民族が各々の伝統文化を紹介し、音楽、ダンス等を通して文化を守り、祝祭を通じて地元の人々と伝統を共有している。



しかし一方で、マレーシアの歴史的背景として、民族衝突事件「5・13事件」や、イギリス植民地時代

に採用された分割統治の歴史があるとの回答もあった。5・13事件以降、異なる民族間の



受け入れは進んでいるものの、ごく一部の人々は抵抗感を持っているようだ。現在でも、外見に対する批判や人種差別や理解不足、文化や宗教の違い、異言語によるコミュニケーションの困難さを生み出し、時には攻撃的な行動を引き起こす人がいる等の問題が挙げられている。

・ 考察

マレーシアのように、異なる民族や文化が共存する社会においては、相互理解と共通の価値観を育むことが非常に重要であり、学校教育を通じて早い段階から多文化理解が促進されているからこそ、民族間の摩擦を軽減し共存を支える基盤となっているのではないだろうか。

一方で、マレーシアが抱える人種差別や言語の障壁等は、万国共通の課題であり、外国人住民との共生を促進するための言語教育支援や、差別をなくすための啓発活動、地域社会での交流活動を通じて外国人住民との関係を深めることが、日本の多民族・多文化共存へと繋がるのではないか。

・ 感想

マレーシアの人々は伝統文化を守り続けるために尽力していることがわかった。マレーシアの多文化共存に関する学びを日本に反映することで、今後日本がどのように多民族・多文化社会を築いていくべきかを考える良い機会となった。日本は、日本古来の伝統文化を守り続け、且つ多様な文化を尊重し、受け入れる姿勢を育みつつ、具体的な課題に対処するための施策を講じることで、より調和のとれた多文化社会の実現に繋がる。

今後は、今回の派遣で得た知識をもとに日本の多民族・多文化共存について学び、探究学習に繋がっていきたいと思う。

自由研究

マレーシアでの食文化と気づき

共愛学園高等学校 2年 佐藤希乃花

〈動機〉

自宅が日本料理店を営んでいることから、幼少期より食文化に触れる機会が多くありました。特にマレーシアの多様な食文化に興味を持ち、日本料理との比較を通じてその違いや共通点を深く理解したいと考えています。この興味を基に、食文化の比較研究をテーマに選びました。

〈研究結果〉

私が体験してきた食事は「スチームボート」「飲茶」「インド料理」「ニョニヤ料理」「西洋料理」「中華」「マレー料理」の7つである。マレー系の食文化として「スチームボート」「ニョニヤ料理」「マレー料理」中国系の食文化として「飲茶」「西洋料理」「中華」インド系の食文化として「インド料理」の3つに分けられる。しかしマレーシアは多民族国家であるため、箸、フォーク、スプーンがどの場所でも用意されていた。「マレー系」辛いものから甘いものまで幅広く種類があり、パンバンリーフやターメリックなどのリーフ系や唐辛子などの香辛料が多く使われていた。料理によって多少の違いはあったがカレーっぽいテイストのものが多かった。またグレープフルーツの果肉をほぐしたものがサラダに入っていたり、乾燥させたライチがお鍋に入っていたり、現地と日本では果物の食べ方の違いもあった。さらに、ココナッツミルクが主食やデザート、ご飯を炊くときにも使われていた。日本のココナッツミルクは甘いものが多いけどマレーシアは甘さ控えめで不思議な味だった。見た目としては赤・白・青の3色がメインとされていてイギリス国旗の配色と黄色の三日月と星はイスラム教のシンボルでスルタンの権威を示しているためであった。ご飯の色が青色だったり料理が葉っぱの上に乗せてあったり、赤パプリカが入ってい



たりと、全体的にカラフルだった。青いご飯はナシレマと言って白米にココナッツミルクを混ぜ煮干しやフライドチキン、卵などと一緒に食べるマレーシアの国民食だそうだ。「中国系」初めて体験したのは飲茶という食文化だった。飲茶とは暖かい中国茶を飲みながら点心（一時の空腹をいやすための少量の食事であり、小籠包やシュウマイ、お菓子など）を食べるというものだ。お茶と楽しむからなのか全体的に味が濃い印象を受けた。中国系の食べ方には少しの違いはあったが日本でも親しまれている味だったため全体的に食べやすかった。見た目としては日本の中華料理ではみないピンクや黄色などの配色になっていた。「インド系」マレー料理よりも匂いが強く、香辛料が多く使われていた。全ての料理がカレーに似ているようなテイストで辛いものが多かった。また右手で食べる文化があるため箸やフォークを使っても食べにくかった。手をつかって食べることが多いにもかかわらずお手拭きがないことに驚いた。インド料理のカレーと日本のカレーでは食感の違いがあることに気づいた。調べてみると、とろみの付け方に違いがあり、日本のカレーは小麦粉によってとろみをつけるが、インド料理のカレーは食材から出る水分や油などからとろみをつけるということがわかった。



《感想》

味の濃さや食感、色味などで日本との違いをたくさん見つけられた。相手の国の食文化を体験することで自分の好きな食べものが増え、マナーを知ることができた。何事においても相手を理解することはとても大切だと思った。



自由研究

マレーシアと日本のボランティアに取り組む姿勢

高崎商科大学附属高等学校 2年 池澤 星夏

動機

募金活動をしているときに、募金をしてくれない人は目も合わせてくれず、少し心が寂しかったからです。もちろん、募金はその人個人の気持ちで行うものです。「イスラム教では、困っている人がいたら助けてあげるのが義務」という教えがあり、ボランティアに参加する気持ちや意識の違いを知りたいと思ったからです。

研究方法

現地の人への聞き取り

結果

マレーシアでも洪水などの被害に遭った方々への募金活動を行っていることがわかりました。募金をしてくれる人は、一度このような募金活動に助けてもらった人や、困っている人を助けたいと強く思う人が多いそうです。また、イスラム教では善を行い、常に人々を助けることを考えていますが、一般的には困難な状況にあるかどうかに関わらず、誠実に人々を助けているそうです。そして、何を望んでいて、お金をどのように使って欲しいのかを明確にすることで、募金活動に参加してくれる人も理解してくれるそうです。

そのような話を伺い、日本ではもっと他人を思いやる気持ちが必要なのだと思いました。そして、募金をお願いする側としては、どうして募金活動



をしているのか、そのお金は誰のためになるのかというのをより明確に伝えることで、活動の幅も増えるのだと思いました。

マレーシアと日本のボランティアに取り組む姿勢は、困っている人を助けたいと思い始める行動だということは変わりません。宗教の問題ではなく、日本ではもっと知ることが大切だと思います。知らないとも始まりません。どのようなボランティア活動にも当てはまるのではないのでしょうか。参加するには知らないと参加できません。もっと情報を拡散し、大勢の人たちに問題を知ってもらい、募金活動などに参加してくれる方々を増やすべきだと思いました。

まとめ

マレーシアと日本のボランティア（募金活動）に取り組む姿勢はあまり変わりませんでした。困っている人を助けたいという思いから生まれる募金活動。マレーシアでは日本よりも募金活動に参加する人が多い理由は、集まったお金がどう使われるのかというのを意識している人が多いことが理由の一つであると思いました。日本での課題と対策を知ることができてよかったです。学んだことをこれからのボランティア活動に活かしていきたいと思います。



自由研究

マレーシアの教育制度から学ぶもの

高崎健康福祉大学高崎高等学校 2年 大山 桜來

私の自由研究のテーマは、「マレーシアの人たちは宗教も言語も異なる相手とどのように接しているのか、また、マレーシアのような多種多様な人々が共存している社会では、自分と異なる文化を持つ民族に対してどのような考え方を持っているのか」です。私がこのテーマにした理由は、私の将来の夢が教師であり、日本の教育について調べていたときに、日本の教育課題のひとつとして、「教育の現場で人種や宗教面での偏見や差別が少なからずある」という問題に関心をもったからです。

今日の日本では急速な国際化に伴い、多種多様な文化や背景を持つ人々の共存社会化が進んでいます。日本の教育現場では、自分とは異なる人種や文化などへの理解が足らず、偏見や差別が起ってしまうことが問題に挙げられています。私はこのような問題が起きるのは、島国である日本特有の問題ではないかと考え、多民族国家であるマレーシアに住む人たちは自分と異なる民族に対してどのような考え方をもちながら接しているのか、その考え方や方法を知りたいと思いました。

研究方法は現地の方々や訪問校で知り合った友達に質問すること、また、自分の目で見て肌で感じ取ることです。私は最初、人と人とのコミュニケーション術をたった6日間で掴むことなんてで



きるのか、そもそも、マレーシア現地の人の話は私の拙い英語力で聞き取れるのか、非常に不安でした。しかし、実際にマレーシアへ降り立ったとき、そこは私



の想像をはるかに超えるものでした。マレーシアの人々はそれぞれが異なることを当たり前と考え、自分と相手の違いを理解し合っていることがわかりました。宗教の越えられない壁を理解し、相手が触れられたくない話をしない、などたくさんのことに気を配りながら人とコミュニケーションを取っていました。そして、そうした素晴らしい考えを形成しているのは、マレーシアの教育制度にあると考えました。マレーシアでは初等教育から選択授業があり、マレー語、インドネシア語、中国語など、様々な言語の授業を選択することができます。幼いときからこのような制度や学ぶ機会があるからこそ、世の中にはたくさんの宗教や民族が存在しているというのが当たり前で、こうした考えがマレーシアという多民族国家を形成しているのだな、と感じました。

研究結果

これらの経験を経て、私は日本の教育制度に、マレーシアのような初等教育から言語や多種多様な文化を学ぶことのできるような選択授業を取り入れることができたら良いな、と考えました。私はまだ高校生で社会や世界の仕組みなど、まだまだ考えや経験が至らない点もあるかと思います。しかし今回得られた貴重な情報とそこから得られた課題を胸に抱きながら、これからの社会のあり方を考える上で役立てていきたいと考えています。

自由研究

マレーシアの学校生活と宗教について

群馬県立中央中等教育学校 1年(高校) 中島 美咲

○目的

多民族国家のマレーシアの学校生活における宗教・民族差の受け止めや、相互理解の意識はどこまで進んでいるのか知ること。

イスラム教が多くを占める中で多民族国家に生まれ育つ人々はそれ以外の宗教の人とどのように付き合っているのかを知ること。また、その基盤の構築方法を知ること。

○方法

現地視察 インターネット 書籍

○リサーチクエスト

多民族国家に住む学生は相互理解という共同生活の基盤を、どのようにして構築するのだろうか。

○ポイント・キーワード

多民族国家 相互理解 学校 生徒 共生

○研究結果

現地のガイドさんのお話、インターネット、書籍での情報収集を通じて、マレーシアにはイスラム教を信仰する人が約61%、仏教を信仰する人が約20%、ヒンドゥー教を信仰する人が約6%と多宗教国家であることがわかった。これは、マレー系、中国系、インド系の人々の構成比率とほぼ同じだ。ブミプトラ政策などにより、マレー系の優遇はある程度あるにしろ、マレー系、中国系、インド系の人々がそれぞれ生き生きと生活しているのを目の当たりにし、多民族国家であるのを感じられた。

現地のガイドさんのお話によると、学校はマレー系、中国系、インド系と3つに分かれており、それぞれの文化の子供達が自分たちの宗教にあっ

た形で学ぶことができるそうだ。現地を視察していると、看板の文字が中国語で書かれた中国系の学校や、スカーフを巻いた子供たちが出入りするマレー系の学校など、確かに違いが見られた。しかし、これらの学校は、宗教で分断されているわけではなく、中国系や、インド系の子供がマレー系の学校にいることも自由である。実際に訪問したマレー系の学校では、様々な宗教、文化の生徒たちがそれぞれの文化の踊りを見せてくれたり、交流も活発だった。このような姿勢や、宗教により在籍する学校の義務化がないという制度が、他文化を容認し、尊重する姿勢に繋がっていると考えた。

現地の生徒に話を聞いてみたところ、クラスは男女同じだが、授業は男女別で受けることもあるということだった。それ以外にも、お祈りの時間が設けられているなど、各文化自体の尊重の姿勢も多く見られた。

街全体を見ても、看板の文字や各文化の街、モスクや寺院など、たくさんの文化が独自性を保ちつつ、融合してクアラルンプールを形成していることが感じられた。このような環境下での生活が、生まれた時から多文化理解の基盤を形成していると考察した。

これらの、それぞれの文化の尊重と、共同生活が、相互理解の基盤を形成していると結論づけた。

○感想

事前の情報収集と、実際に目で見て体感してきたこととは、やはり違うものなのだと感じられた。これからの学校生活や、将来において、今回学んだ多文化理解の基盤をどのようにして日本や世界で適用していくか考えていきたい。



自由研究

日常生活と宗教 ～宗教との関わり方～

伊勢崎市立四ツ葉学園中等教育学校 1年(高校) 石原 詩音

動機

日本は特定の宗教を信仰している人が少ない、いわゆる「無宗教」の国である。そのため宗教と聞くと自分とは遠いもののように感じる、信仰している人との関わり方がわからないという人も多いだろう。しかし国際化が進む現代社会において宗教との関わり方を学ぶということは、リテラシーとしても必要なことではないだろうか。マレーシアでは多くの人がイスラム教をはじめとした多様な宗教を信仰している。そこでマレーシアから宗教の在り方や関わり方を学び、これからの日本における宗教の在り方を考える。

研究方法

- ・ 現地視察
- ・ インターネット

調査結果

マレーシアにおける各宗教別の人口構成はイスラム教が61%、仏教が20%、キリスト教が9%、ヒンドゥー教が6%であり、街にも多くのモスクや教会があることからその多宗教さが覗える。またプラトモスクやバトゥー洞窟といった現在も使用されている宗教施設が観光資源として利用されているということは日本との大きな違いだろう。他にもショッピングセンターのスカーフ専門店や病院の礼拝室など、日常的な風景からも宗教をみることができる。

次にコミュニケーションからみる宗教だが、学校での様子を例に説明したい。訪問した学校では服装などからそれぞれの宗教の違いが垣間見えたが、それによる壁などはなく、宗教の同異無関係にコミュニケーションをとる様子が見受けられた。

考察

前述した通り、マレーシアにはプラトモスクをはじめ現在も使用されている宗教施設が観光資源になっているものも少なくない。これは日本とは大きく異なる点のように思う。日本にも法隆寺のように観光資源として利用されている宗教施設は存在する。しかし修行などで現在も使用されている施設が観光資源となっているものは極めて少ない。このことは宗教をどこかタブー視する日本の風潮を感じさせる。もしくは公に開かれていない

聖域的捉え方が強いのかもしれない。建物や制度の違いもそうだが、なによりこの「宗教への意識」が日本とマレーシアの間で決定的に異なっている。コミュニケーションの様子や日常に溶け込んだ宗教関連物から、マレーシアでは宗教を「当たり前なもの」として捉えている。それに対し日本では特定の宗教への帰属がない故、宗教を特別視する傾向があるのではないだろうか。私はこの「特別視」を徐々に減らしていくことが宗教理解への一歩になると推察する。

感想

実際に多宗教の国を訪れたことによって多宗教国家と日本との宗教の在り方の違いについて身をもって知ることができた。日本の特定の宗教への帰属率などからも完全に日本にとって宗教を当たり前なものにすることは難しいかもしれない。それでもこの過度な特別視を減らしていくことがグローバル化に適応し、多様性を理解することの一助になるのではないだろうか。





世界に視野を広げて

茨城県立緑岡高等学校 2年 大金 温志

マレーシアに着くと外は夕方で、クアラルンプールのビル群が見えてきた頃には空はピンクで染まっていた、美しかったことを今でも覚えています。「遂に派遣事業が始まった。」そう、思える景色でした。

応募当時から振り返ると、初めての海外、初めての赤十字関係の事業への参加で、少し不安がありました。しかし、その不安に打ち勝つぐらいに、自分の視野を広げたいという気持ちがあり応募をしました。

今回の研修を終えて、普段の日本での生活とマレーシアでの生活の違いを様々な形で実際に肌で感じ、貴重な経験を得た機会となりました。特に、この事業を通してマレーシアと赤十字のそれぞれで驚いたものがあります。

まず、マレーシアは多民族国家で、様々な民族や宗教を信仰する人々と共存していることに驚きました。民族や宗教などで異文化を感じることはない生活をしている日本人にとって、互いを尊重するということが、今までずっと疑問でした。でも、この派遣を通して相手の宗教的な食事管理、お祈りでの違いを理解し、気遣いをするのが大事であり、それが尊重することだと学びました。異文化に関しても、日本がマレーシアから見習えることは多くあると感じます。

この事業で赤十字に関しての「国際理解・親善」など実践目標や原則、活動など事前研修やメンバーから初めて知ることが多くありました。また、



研修を通して、赤十字社が赤新月社、IFRCなどと様々な形で国内のみならず世界と繋がっていることを知り、多くのことに驚かされました。この事業に参加して赤十字を知れたことも、自分にとって大きな収穫だったと思います。



最初に述べたように、初めは「自分の視野を広げる」ことが今回参加した一番の目的でした。今回の派遣期間で多く刺激を受けて、自分の視野を世界まで広げ、目的は達成できたと感じます。ですが、自分自身に留めておくだけではもったいないぐらいに、1日1日が充実した研修となり、学びや経験、見た景色などを人に伝えたいと感じるようになりました。なので、多くの人に様々な形で伝えていき、自分以外の今後にも繋げられるようにしたいです。

今後ともJRC活動を通して普段味わえないような体験をしていきたいと思っていますが、JRC部員をはじめとするもっと多くの人が交流やボランティア、今回のような赤十字事業にも参加してほしいと考えています。様々なことに挑戦することで多くの経験ができ、想像以上の自身の成長、学びを得ることができると思います。ぜひチャレンジ精神を持って今後の活動の幅を広げていってください。

最後に、派遣メンバーをはじめ今回の派遣で関わったすべての人に感謝の気持ちでいっぱいです。そして、このような貴重な機会を与えてくださった各支部の職員をはじめとする日本赤十字を支える皆さまに心より感謝申し上げます。本当にありがとうございました。



マレーシア派遣を振り返って

茨城高等学校 2年 小林 未生

飛行機で7時間、私は私にとって初めての海外であるマレーシアにたどり着きました。日本とはちがうかと、マレーシアの空気に触れて直感的に感じ、とてもワクワクしました。それと同時に、とうとう本番だなと感じ、不安や緊張でいっぱいだったことを今でも鮮明に思い出すことができます。空港や町中にあふれる文字はほとんど読むことができなくて、たまに見かけた日本語にうれしさを感じたり、様々な格好の人々の間で交わされる言葉は全くと言っていいほど聞き取れなかったりしたことは海外ならではの貴重な体験だったなと思っています。自分の身をもって、マレーシアを体験し、自分が知らなかった世界をのぞいて、印象に残ったり良い思い出になったりした出来事がたくさんありました。

まず初めに、全体を通して私の印象に残っていることとして、マレーシアはマレー系、インド系、中華系などにより、宗教や言語などの文化の違いが多いけれど、国民全体のまとまりを感じることができたことがあります。マレーシアが多民族国家であるということは、事前に調べ知っていましたが、そのような中でどのように異文化理解が行われているのか、私はとても気になっていました。それに対する答えは、マレーシアで4日間過ごして、身をもって感じる事ができたと思います。まず、街を見てみると、それぞれの文化を象徴す



るような建物などが、一つの街に混在していました。街中をバスで移動していたときに、チャイナタウンを見かけたり美しいモスクが遠くにあたりたりして、



窓の外の景色を眺めて、マレーシアらしさを楽しむことができました。それに加えて、街中のいたるところにマレーシアの国旗がたくさん飾られていたことも印象深いです。現地ガイドさんによるとそれは、来月の独立記念日を祝うためのものだそうです。国民たちのマレーシアという国に対する愛や誇りが感じられて、感銘を受けました。

また、現地の学校の生徒たちとの交流も素晴らしい思い出になりました。生徒たちは、私達に積極的に話しかけてくれて、写真を撮ったり伝統文化について教えてくれたりして楽しい時間を過ごすことができました。日本に興味を持っていてくれた生徒も多く、これからもSNSなどで交流ができればいいなと思いました。

マレーシアで気づくことができた価値観や考え方を大切にしながら、これからの人生を歩んで行きたいです。

最後に、このような機会を私達に与えてくださった皆様、派遣メンバーのみんなに感謝を述べます。貴重な経験を本当にありがとうございました！



はっと気付かされたこと

茨城高等学校 2年 田川 京華

私は今回のマレーシア派遣事業でマレーシア赤新月社の方のお話を聞き、現地校の方との交流を通して、JRCの活動の「幅」について考えさせられた。

3日目に訪れたマレーシア赤新月社本社ではマレーシア赤新月社の活動についてのお話を聞いたが、特に印象的だったのが「ユースボランティア」の活動だった。ユースボランティアは18歳から30歳以下のボランティアからなる組織である。ユースボランティアの代表であるミシェルさんからお話を聞いたところ、「自分たちがやりたいと考えたことは集会を開き上層部と話し合い、必要に応じてIFRCと相談をしている」そうだ。また、「新型コロナウイルス蔓延期間はボランティアで大変だった！」とも言っていた。そして「それは学校に行くことのできない自粛期間で、自分たちには何ができるかを考えた結果である」と。私ははっとした。それを自分の活動に重ねたからだ。私のJRC活動はというと、基本的に学校から「このような活動はどうですか？」という募集を受けてからボランティア活動をしている、いわば、受動的なものだったからだ。ここで私のJRC活動に対する考え方が変わった。

私たちでも自分たちで考えて行動できる機会はあるのだろうか。高校生になり、JRCにも加入したときからずっと抱いていた疑問だ。正直に言うところからなかった。しかしそれは行動に移さな



いからわからなかったのだとこの派遣事業を通して気がつくことができた。現地のユースボランティアの方は「むしろ会議の時間を楽しみにしている」と言っていた。それは「自分の意見が反映され行動に移される機会」だからだ。私もそれは必要であると考えた。そのためには、意見の言える環境をこれから学校のJRC内からでも作っていく必要があると思う。

今回のマレーシア海外派遣で海外のボランティア活動に触れ、今までのJRC活動に対する活動について顧み、今後の活動について積極的に取り組んでいこうと感奮興起する貴重な機会を得た。こうして現地校の方々との交流は私にとってはかけがえのないものであった。ここで得た知識と経験を糧にし自分たちのJRC活動に活かしていきたい。

マレーシアでお世話になった方々、一緒にこの3ヶ月間にかけてともに協力してきた指導員の先生方や友達の皆さん、本当にありがとうございました。





初めての海外派遣事業

清真学園高等学校・中学校 2年（高校） 坂本 彩葉

学校教育やJRC部の活動に対して興味があったので、顧問の先生からこの事業を紹介されたときに応募することを決めました。しかし、面接では上手く答えることができず、落ちると思っていたので合格したときは本当に嬉しかったです。

私は、派遣当日までマレーシアの知識はもちろん、現地で知りたいことをできる限りメモ帳にまとめるなど様々な準備をしましたが、現地ではそれ以上に初めてのことが多く、とても大変でした。

マレーシアに到着すると、英語や中国語などの様々な言語で表記されている看板を目にしたたり、聞き馴染みのない言葉が聞こえたりして徐々に外国にいるという実感が湧いていきました。

現地の食事もインド系、マレー系など様々な食文化を体験できました。青いご飯や南国フルーツなど日本では味わえないものを食べることでとても面白かったです。苦手な辛い料理にも挑戦してみましたが、一口食べただけで口の中が痛かったです。

現地の赤十字関連施設や学校を訪問した際、施設の方や生徒の皆さんが温かく歓迎してくれてとても嬉しかったです。学校では生徒たちが伝統的な衣装や踊りを披露してくれました。どれも明るい曲調で、一緒に踊るときも初めは恥ずかしかったのですが、生徒たちが隣で一緒に踊ってくれたので私も楽しむことができました。また、お祈りの場面も見ることができました。そこでは、手を広げて一緒にお祈りする人と私たちと同じように静かに座っている人に分かれていて、多文化主義

のマレーシアの特徴を発見できました。

さらに、私たちの発表や帰り際の交流タイムでは現地の皆さんがとても楽しそうにスピーチを聞いてくれたり、積極的に声をかけてくれてとても嬉しかったです。特に、私たちがボニョの歌を披露した際に、ウェブをすると、生徒たちも一緒にウェブをしてくれたことがとても嬉しかったです。学校訪問では、日本とはまた別の盛り上がり方を知ることができて、初めは現地のノリについていけないか不安でしたが、何事も楽しむことが大切なんだと感じました。

最後に、今回の派遣で私は日本や自分のことを客観的に観察するきっかけになったり、貴重な体験をしたり、とても有意義な時間を過ごすことができました。また、コミュニケーション能力を高めることもできました。昔から人見知りだったのですが、今回の事業ではメンバーや現地の方々に積極的に挨拶をしたり、話しかけたりなど多くの人とコミュニケーションをとったり、簡単な文法やジェスチャーを使って英語で質問ができました。

これからは、今回の派遣で学んだことや思い出を部員や同級生などさまざまな人に伝えたり、見つけた長所を今後の生活に活かしていきたいです。

派遣メンバーの皆さん、先生方、そしてこの研修に携わってくださった皆さん本当にありがとうございました。



感想文

「楽しい」「嬉しい」を感じられる幸せ

常総学院高等学校 2年 関 健佑

今回の派遣事業のお話を顧問の先生から伺ったとき、私は最初、あまり参加する気にはなれませんでした。私はコミュニケーションをとるのがあまり得意ではなく、学校でも、話しかけてくれた友達と上手く会話を続けることができずに迷惑をかけてしまうことが多かったからです。初めて話すメンバーとの活動がとても不安でした。しかし、顧問の先生が熱心に勧めてくださり、私の中で、もっとみんなと話せるようになりたい、自分を少しでも変えるきっかけにしたいという思いが次第に強くなっていきました。事前に練習してから臨んだ面接で派遣メンバーに選ばれたときは、とても嬉しかったです。

マレーシアへの派遣が決まると、支部研修会、事前研修会がありました。初めての経験に緊張してあまり話せずにいた私でしたが、みんなが優しく声をかけてくれたので、このメンバーとなら頑張れる、私もみんなのために尽くせるような人になりたいと思うことができました。みんなと一緒に進めた交流会の準備、楽しかった食事は、忘れられない思い出です。

7月21日からの6日間を迎えるにあたって、私は「派遣メンバー全員と話をする」、「現地の人とは笑顔で交流する」という2つの目標を決めました。当たり前のことかもしれませんが、私にとって、これは乗り越えなければならない大きな壁でした。支部研修会や事前研修会では、同じ県のメンバーとは話すことができても、他県のメンバ



ーと話すということはなかなかできませんでした。また、私は初対面の人と話すときに緊張で顔がこわばってしまい、相手に悪い印象を与えてしまったという経験があるため、そのような事態を避けたかったからです。マレーシアで過ごす日々を充実したものにするためにも、この2つの目標を意識して頑張りました。その結果、今まで以上に多くの人と会話をすることができ、会話が弾むことの楽しさ、笑顔でいられることの嬉しさを実感しました。

派遣事業を終えた今、私に求められる役割は、派遣事業での経験を周囲の仲間へ伝え、今後のJRC活動に活かしていくことです。今回の派遣事業で学んだことを決して無駄にはせず、日々の活動に還元できるよう頑張っていきたいと思います。また、今回の派遣事業を通して、学校でJRC部に入ったこと、顧問の先生からお声かけいただいたこと、派遣メンバーに選ばれたこと、みんなと出会えたことに奇跡の重なりを感じるとともに、自分を支えてくれた多くの皆様への感謝の気持ちを大切にしたいと思います。みんなと過ごした時間は、私にとって忘れることのできない大切な思い出です。

最後になりましたが、今回の派遣事業を共にできたメンバーのみんな、先生方、支部職員の皆様、看護師の金子さん、添乗員の功刀さん、現地で支えてくださった全ての皆様、本当にありがとうございました。





私の海外派遣

栃木県立鹿沼東高等学校 2年 岡川 航士

「感謝」この言葉がこの派遣事業のすべてを表していると思う。

最初に派遣事業の話をいただいた時から、私の頭の中はマレーシアのことでいっぱいになった。というのも、私は以前からアジアの文化や都市経営に興味があったからだ。親にも相談せずに勝手に話を進めていたのは今でも申し訳なく思う。しかし、それほどまでに私の心を惹きつけたマレーシアとはやはり偉大な国だ。

実際に行かせていただいたマレーシアは自分が調べたものとは大きく異なっていた。まず、都市景観についてだが、インターネットで見る画像では、ビル群ばかりで自然がほとんどないように見えた。しかし実際バスの中から外を見ていると、ビル群の中にも自然が見られ、緑の豊かさに驚いた。

食事に関しても驚きが多かった。今回の派遣では毎食中華やインド料理など、様々な料理を食べられる機会があったので、とても新鮮だった。中には自分の口に合わないものもあったが、必ず一口は食べるように意識した。異国の食文化に触れるという面においては大きく成長できたのではないかと思う。

今回の派遣の中で1番印象に残っているのは、現地での学校訪問だ。訪問先へ向かうまでは、「うまく現地の生徒たちと交流できるのか」「発表がうまくいくのか」と心配事が多く緊張していたのだが、そんな心配は一瞬にして吹き飛んだ。現地の生徒達はとてもフレンドリーで、私たちに対して



警戒することもなく、一緒に盛り上がり上げてくれた。忙しい日程の中で疲れていた私の心は彼らの笑顔

で元気を取り戻せた。言語の壁があったとしても心と心で通じ合えば思いは伝わると気づくことができたのは、とても大きな財産になったと思う。

最後に、冒頭に述べた「感謝」についてだ。まず、私が資料作成や初めての海外に不安を抱えていた時に相談に乗ってくれた顧問の斎藤先生をはじめとした指導者の方々、まったく相談せずに申し込んだにも関わらず快く送り出してくれた両親、私が現地で不安な気持ちでいっぱいだった時、たくさん連絡してくれた高校の友達。どれか1つでも欠けていたら私の派遣事業はここまで実りのあるものになっていなかったと思う。心からの感謝を伝えたい。

そしてなにより今回の派遣メンバーには感謝してもしきれない。それは特に5日目の加盟校訪問の際に強く感じた。その日はWi-Fiの調子が悪く、発表までに空き時間が生まれてしまった。その時、ほかの栃木県メンバーが私にアドリブで日本語紹介をすることを提案してくれた。初めは戸惑っていたが、やるしかないと思い、思い切ってやったところ、他県メンバーが盛り上げてくれて、最終的には現地の生徒たちもとても盛り上がり上げてくれた。その時私は多くの人に支えられていると気づき、思わず涙が出そうになった。あの瞬間が今回の派遣事業のすべてだと思う。

書きたいことは山のようにあるが、この辺で筆を置こう。最後にこの言葉を残しておく。“Terima Kasih Banyak Banyak.”



感想文

マレーシア派遣

栃木県立小山西高等学校 2年 中谷 心海

私はマレーシア派遣の団員に選ばれたと顧問の先生から聞いた時嬉しかった反面、心配もありました。初めての飛行機、初めての海外、他県のメンバーと仲良くなれるかなど不安なことが多かったけれど、事前研修の時にメンバーがたくさん話しかけてくれたおかげで不安はなくなり、早くこのメンバーでマレーシアに行きたい！と思うようになりました。

5泊6日のマレーシア派遣を終えて、マレーシア派遣でしか味わえない貴重な経験ができました。その中で私は特に印象に残っていることが2つあります。

1つ目は現地ガイドさんによるバスの中での語り部ツアーです。私はマレーシア派遣が決まってからマレーシアのことについてインターネットなどを使って調べました。現地ガイドさんはマレーシアについてとても分かりやすく説明してくださったおかげで、事前に調べた時よりもマレーシアのことをより理解することができました。また市内視察で気になったことを質問すると、細かく教えてくださったので自由研究にとっても役立ちました。

2つ目は青少年赤十字加盟校訪問です。学校へ到着したときの歓迎のパレードは今まで体験したことのないくらいの盛大なパレードで感動しました。交流会では練習でできなかったことを意識し、栃木県メンバーと沢山意見を出し合って改善をしたので今までで一番良い発表ができました。トラブルもありましたがスムーズに対応できたので成長を感じました。また現地の学生はとてもフレン



ドリーでたくさん話しかけてくれました。私は英語が上手に話せなくて何度も聞き返してしまい申し訳ない気持ちでしたが、「picture!」と笑顔で声をかけてくれたことがとても嬉しく、友好関係を築けたことが一生の宝物です。

この他にもIFRCの訪問のときに学んだ災害救助の時のポイントや赤十字病院で知った多文化の国で患者を診察するとき気を付けていること、海外の人とのコミュニケーションの仕方を、これからのJRCの活動で校内だけでなく他校のメンバーにも共有していきたいと思いました。また、今回の派遣を通して物事をよりよくするために自分の意志を伝えられるように成長したことを生かし、今後県役員として様々な活動に役立てたいです。

また、無事にマレーシア研修を修了できたのは先生方、県支部の方、メンバーのおかげです。約3か月というとても短い期間でしたが楽しい時間をみんなと過ごせたことが思い出です。ありがとうございました。





マレーシアで得た大切なもの

栃木県立栃木女子高等学校 2年 渡辺 璃虹

この派遣事業でたくさんの素晴らしい経験や出会いがありました。

マレーシアで出会った方々の人柄に心動かされました。みんな優しく、明るいばかりでした。学校訪問で出会った同年代の学生達は気さくに話しかけにきてくれて、一緒に写真を撮ろうと誘ってくれました。学校訪問では温かい雰囲気でも歓迎してもらえて幸せでした。私は流暢とは言えない英語でしたが、現地の方は会話する際にわかりやすくゆっくり伝えてくれて、ジェスチャーや紙を使って話してくれました。そこで言語が完璧に伝わらなくても、宗教や人種が異なってもただ真っ直ぐに相手に伝えたいという気持ち、そして相手を思う気持ちが大切なのだと感じました。

次に食事です。マレーや中華、インドなど様々な国の宗教や文化が関わっている料理を食べました。それぞれの料理で味付けが大きく違い、食べる形式もワンプレートからバイキング形式などそれぞれの料理によって違いがありました。食事のマナーや食べる順番も異なっていて、初めは少し戸惑いもありました。生まれてから今まで味わったことの無かった料理に触れることができました。世界の食事に触れられる貴重な経験だったと思います。マレーシアの学校訪問では伝統料理を食べる機会もあり、現地の味をダイレクトに感じられて良かったです。同じ食事という行為でも日本とマレーシアで大きく異なることを学びました。



また、この派遣事業で出会った仲間との出会いが私の中ではとても大きいものとなりました。事前研修では、顔も名前も知らないメンバーで、不安もありました。発表準備などでぐっと距離が縮まり、帰りの空港では離れたくないと泣きそうになるほど派遣事業を通してかけがえのない友達になりました。

メンバー、そして指導者の先生方の支えや助けなしではやり遂げることはできなかったと思います。最終日に近づくにつれ、初日へ戻りたいと思うほどとても充実した楽しい6日間でした。

高校生の時期にこのような海外派遣事業に参加し、普段の生活では経験できないことができたのは私の人生の大きな財産になると思います。ここでの思い出は全てかけがえのない大切な宝物です。この海外派遣に行くにあたり、関わった全ての人へ感謝を忘れず、これからの活動に励みたいです。





Brand-new myself

栃木県立真岡女子高等学校 2年 横山沙都美

—互いに距離を埋めるのではなく、どれだけ離れているのかを測ることが大切—

事前研修の際に齋藤先生がおっしゃったこの一言が胸に強く響いている。

本事業の存在を知った時から、いつか自分も…！と夢見てJRC活動に勤しんできたことは確かなのだが、いざ派遣が決まれば話は別。海外を訪れた事もなければ飛行機の経験すら全くない私にとって、総てが新鮮で、未知への挑戦だった。

6日間の濃密な時間を通して、日本とマレーシアの相違点をダイレクトに感じ取るのみならず、「自分自身の新たな発見」を経て知見を広げ、深めることができた。

まず相違点でいえば、トイレ事情だ。事前に聞いていたような、紙がなく手動ウォシュレットというマレーシア元来の様式は水を流す際に当然の如く水が溢れ出てきて衝撃的だったが、紙が洗面台に設けられている先取り様式や日本同様の様式が街の大半を占めておりグローバル化の片鱗がみられた。

また、施設訪問の際に関わった現地の方々の積極性と並々ならぬコミュニケーション力には感銘を受けた。特に加盟校での心づくしの歓迎（伝統パフォーマンスの数々、いきいきとしたレスポンス、流暢な日本語、そして弾けるような笑顔）は心温まるひとときであった。同時に、生徒の「日本が好き！」という思いがひしひしと伝わってきて、日本人として誇らしく思った。帰国後もSNSのDM機能を用いて日本の様々なことを質



問し知ろうとする熱心な姿勢は我々も見習うべきであろう。どれだけ自分が普段小さな枠組みの中で生きているのかを思い知らされた。

そして、思わぬ産物となったことは「新たな自分との出会い」だ。食事が合わないことに不安を抱きつつマレーシアに降り立ったのだが、いざ始まってみれば何でも食べる雑食タイプで自分自身に心底驚いた。「マレーシアで一番美味しかった食べ物は何？」と尋ねられたら「全部！」と答えるほど充実した食生活を送ることができた。（ごく一部を除いて…！）

マレーシアに足を踏み入れてから何日か経ったある時、ふと「イスラム教の女性の方々はどこでスカーフを手に入れるのだろうか…」「彼女達にとって必需品なのだからコンビニにあっても良いのでは？」と疑問に感じた。近くにいらっしやった榎原課長にその旨を話したところ「店員に聞いてみたら？」とのこと。私は元気よく二つ返事で店員のもとへ尋ねに向かった。その素直さは成長の表れだろう。

マレーシアの地に限らず、共に過ごした“個性の塊”と呼べる14人のメンバーからもらう刺激も私を高みに導いてくれた。本事業がなければ決して交わることがなかった仲間。この仲間や引率者の方々と送っ



た事前・事後研修を含めた10日間の日々は、1分1秒に幸せが溢れ、まさに一生の宝物だ。他にも添乗員や現地ガイド・通訳、赤新月担当者、加盟校の生徒達、そして笑顔で送り出し迎えてくれた両親…旅を支え、お世話になった数え切れぬ沢山の人々にTerima kasih（ありがとう）の想いを伝えていきたい。

全ての人に、幸あれ!!!



マレーシアでの経験を通して

星の杜高等学校 2年 松下さくら

令和6年7月22日、私は初めて海外へと飛び立ちました。今回のマレーシア派遣を通して、私は様々な経験を得て、自分の殻を破り、大きく成長したことを実感しています。この経験は、私の高校におけるJRC活動の本格化に向けた取り組みの一環として、とても有意義なものでした。

多様性が求められる現代において、国際交流や異文化理解はとても重要です。私は以前から異文化に興味を持っており、この派遣事業に応募した理由もその1つです。4日間のマレーシア滞在中、特に印象深かったのは、青少年赤十字加盟校での訪問です。ここでは、マレー系、インド系、中華系の生徒たちが、それぞれの伝統ダンスを披露してくれましたが、民族の垣根を越えて、多様な文化が自然に共存している姿を実際に目の当たりにし、非常に感動したことを覚えています。

また、各民族の伝統文化を体験するワークショップでは、楽器演奏やBatuSeremban、Congkakといった伝統的な遊びを楽しみ、また、イスラム語で自分の名前を書いてもらうなど、異文化との触れ合いを深める貴重な時間を過ごしました。

現地校の生徒たちに多民族共存について聞いたところ、幼少期から共に学び、宗教や伝統行事をお互いに尊重し合うことで、共存の精神を育んでいることがわかりました。この姿勢は、異なる背



景を持つ人々が共に生きる社会を築くための重要な教訓だと思います。

さらに、現地の赤新月社を表敬訪問し、マレーシアの青少年赤十字の活動について学びました。特に、コロナ禍において、赤新月社が罹患者とその家族を繋げる架け橋としてサポートする活動は、困難な状況においても人々を繋げる力があると再認識しました。

マレーシア滞在中には、「スチームボート」や「ニョニャ料理」「飲茶」など、初めての料理に戸惑いながらも、その多様性を感じながら美味しく味わうことができました。

私は英会話力に自信がなかったのですが、現地の方々が親切に接してくれたおかげで、言語の壁を越えて交流することができ、「笑顔は言語の壁を越える」ということを改めて実感しました。

今回の派遣を通じて、私は異文化・多民族共存について多角的に学び、自分自身が大きく成長することができました。勇気を出して一歩前に踏み出すことで、自分に自信を持つことができ、この貴重な経験と知識を、学校やJRC活動に還元し、将来に活かしていきたいと思います。

最後に、この貴重な機会を与えてくださった指導者の方々、一緒に過ごしたメンバーたち、そして家族に心から感謝申し上げます。本当にありがとうございました。Terima kasih





私にとってのマレーシア研修

共愛学園高等学校 2年 佐藤希乃花

私は今年、「将来の自分の可能性を広げるために色々なことに全力で挑戦する」という目標を掲げ、この研修に参加しました。

4月の中旬から始まった応募期間から私のマレーシア研修は始まっていた気がします。作文の構成、面接の答え方、マレーシアの事前調べなど私にとって苦手なものばかりでした。しかし毎日毎日マレーシア研修と向き合っていく中で、苦手なものも楽しさを見出す力を身につけられました。その後、面接で派遣メンバーが決定し、事前研修会で他県のメンバーと初めて顔合わせをするとJRCの魅力が改めて感じました。同じ高校生なのにJRC部として異なる活動をしていたり、JRCに対して色々な思いがあったりしました。多様な人と繋がれて話すことで得られた刺激がたくさんあり、この経験はJRCだからこそ体験できることだと思いました。

私がこの研修の中で大きく心に残っているのはマレーシアでの素晴らしい人達との出会いです。色々な場所を訪問する中でマレーシアの赤新月の方、ユースの方、マレーシアの学校の生徒さんたち、ガイドさん、通訳さんなどたくさんの人との出会いがありました。言語が違う中での人とのコミュニケーションはすごく難しいもので、伝えたいことが言葉にできなかつたり、ジェスチャーが違う意味に伝わってしまつたりと苦戦する場面は多くありました。しかしマレーシアの方々には私たちが伝えたいことを必死に読み取ろうとしてくれ



たり、携帯の通訳機能を使って伝えてくれました。私が何をすべきなのかわからないときに『こっちだよ』と誘導してくれたり、研修中もたくさんのサポートをしてくれました。

会って間もないのにこれだけ優しくしてくれて、私たちのことを考えて行動してくれる姿に感動しました。また私たちを歓迎するために素晴らしい踊りを見せてくれたり、プレゼントをくれたりするなど現地の人の温かさを感じました。そして私たちの活動報告やレクなどをずっと笑顔で聞いてくれていた姿を見た時、すごく幸せになれました。

国際理解・親善の分野で大切なのは相手のことを知って、文化に触れて体験することだと思います。今回の研修では他国の食文化やトイレの使い方、伝統的な遊びなどを体験でき、多民族、多宗教との共存の仕方を学びました。これらはこの研修に参加しなければ絶対経験できないことですし、最高の派遣メンバーがいたからこそ楽しくたくさんのことを吸収して帰ってこられたと思います。

最後に派遣メンバーへ

今回の研修と一緒に参加出来たことを感謝します。訪問先で問題が起きた時、臨機応変に対応したり、現地の人達と仲良くなつたり、きついタイムスケジュールの中で笑顔が絶えなかったのは派遣メンバーの声掛けがあったからです。ほんとにありがとうございました。絶対に忘れられない最高の研修になったと思います。最高のメンバーに出会えたことでJRCという活動は人と人を繋げてくれるということを改めて実感しました。絶対にまた会いましょう！





貴重な経験

高崎科大学附属高等学校 2年 池澤 星夏

今回参加させていただいたマレーシア派遣事業で、多くの貴重な経験をさせていただきました。ただの観光では学べないことがたくさんあり、参加して本当によかったと心の底から思います。特に驚き、非常に貴重な経験となったことが二つあります。



一つ目は、マレーシアと日本の赤十字の活動の違いです。根本的な「困っている人を助ける」という考えや思いはもちろん同じですが、具体的な活動内容が全く異なりました。日本では災害が起きた際に、募金活動や被災地への支援を行います。しかし、マレーシアでは赤十字の方々々が常に本格的な訓練を行い、災害に備えていました。マレーシアの赤十字の方々々は、主に救助や搜索活動を行っており、被災者のメンタルケアも行っていました。このような日本とマレーシアの活動内容の違いに驚きました。



二つ目は、マレーシアの食文化です。マレーシアの食事は独特な香辛料の香りがあり、コクの深い料理が多かったで

す。見た目も日本とは全く異なり、正直言うと食欲をそそられませんでしたが、しかし、挑戦して食べてみる価値がありました。実際に緑色のプリンがあり、勇気を出して食べてみると、とても美味しかったです。挑戦して全てのおかずを食べることを意識しました。酸っぱかったり、辛かったり、甘かったり、初めて感じる味もありました。貴重な経験ができて本当によかったです。

マレーシアの方々も笑顔で話しかけてくれて、言葉が思うように通じず初めはとても焦りました。しかし、マレーシアの方々は明るくて優しい人ばかりで、笑顔で通じ合うことができ、とても嬉しかったです。一生の宝となる学びと思い出、そして友達を得ることができました。

たくさんしたことや人に実際に触れ、ネットでは得られないことを自分の目で見て聞いて、今しかできない経験をすることができました。学んだことをたくさんの人に伝えていき、伝えた人の心に少しでも影響があればいいなと思います。今回学んだことは将来の夢を実現する一歩になりました。この派遣事業に関わり、協力してくださった先生や赤十字のスタッフの方々、本当にありがとうございました。

マレーシアの方々も笑顔で話しかけてくれて、言葉が思うように通じず初めはとても焦りました。しかし、マレーシアの方々は明るくて優しい人ばかりで、笑顔で通じ合うことができ、とても嬉しかったです。一生の宝となる学びと思い出、そして友達を得ることができました。





マレーシアの温かさ

高崎健康福祉大学高崎高等学校 2年 大山 桜來

今回の北関東三県支部国際交流事業はこれからの私の人生を大きく変えるきっかけになりました。この事業に参加する前は自分の進路が明確に決まらず、毎日手探りで興味のもてることを探していました。そんな中、偶然にもマレーシア派遣事業の話を知りました。このような機会は滅多にないと感じ、その場で応募を決意しました。今思い返すと、両親にも相談せずすぐに決意した自分に驚いています。

そして今回の派遣事業での経験を経て、この経験を、これからの子どもたちにも体験してほしいと思うようになり、その時から私の夢は日本赤十字社に就職することになりました。

今回の派遣事業で一番印象に残っているのは、マレーシアの人々の心の温かさです。初めて赤新月社加盟校を訪問したとき、最初は自分だけでなく他の派遣メンバーも緊張している様子でした。準備してきた発表がうまくいか心配でしたが、私がリーダーの挨拶を始めると、加盟校の生徒たちが温かな笑顔で大きなリアクションをしてくれました。その瞬間から空気が一変し、発表は大成功を取めることができました。温かい支援というものは人の能力を何倍にも膨らませることを私に



気づかせてくれました。

また、派遣メンバー全員が今回の派遣を成功させたいという思いから、前泊の夜遅くまで一緒にダンスを練習したこと、



インド料理の辛さやマレーシアのタイ米料理の青さに驚いたこと、帰り際には涙を流しながら別れを告げ、「帰りたくないね」、「名残惜しいね」と語り合ったことなど、すべての経験が私の宝物です。

将来の進路を見据えた学生時代に異文化交流ができる場は限られていますし、同じ志を持つ仲間と交流できる機会は非常に貴重です。この派遣事業で私の将来は確実に良い方向へ変わったと確信しています。このような機会を与えてくださった日本赤十字社に感謝するとともに、この文章を読んでいる方々に青少年赤十字の国際交流派遣事業の素晴らしさが少しでも伝わることを願っています。





分かり合えることの喜び

群馬県立中央中等教育学校 1年（高校） 中島 美咲

今回、マレーシア研修に参加し、本当にたくさんのものを吸収してることができました。一つ一つの出会いが本当に貴重で、有意義なものであったと確信しています。

マレーシア赤新月社やIFRCの訪問の際、感銘を受けたことは大きく分けて2つあります。1つ目は、異なる人種、異なる文化の人々が、一つの方向を向いて一緒に働いていることです。2つ目は、その方々の心にあるのは、皆、「人を助けたい」という強い思いであることです。人道への思いは、どのような人々をも一つの方向に結びつけるのだと感じました。また、目標達成のために生き生きとあの場所に身を置き、働く方々の姿を見て憧れの念を抱きました。次に、最も私の心に残っている経験が、マレーシアの現地の学校に行くことができたことです。マレーシア赤新月社ではMRCユースの方に英語で質問をすることができましたが、学校で同年代の方とくつろいで話げることがとても印象的でした。民族衣装に包まれた生徒たちが踊る姿をみて、食い入るように見つめたあの興奮は、とても言葉にできません。発表やダンスで盛り上がった会場で、もはや文化の違いという障壁はないに等しく、英語を使って意思疎通ができたことに本当に感動しました。頑張っで勉強をしたマレー語を、挨拶や自己紹介で披露すると、本当に喜んでもらえました。異文化間での交



流には相手の文化へのリスペクトが大切であると感じられた機会でした。特に、アイシャという友だちにステージまで連れて行ってもらい、たくさん話をした、この経験は研修を通じて「英語で意思疎通できる」「文化の違いは誰かと友だちになるのには全く関係ない」という大きな自信になりました。

マレーシアの街並みや、人々の寛大さ、日本とは違うトロピカルな薫りなど、全てが新鮮で、強烈でした。積極的にたくさんの人と英語やマレー語で会話できたことが、本当に大きな自信になりました。

最後に、改めて今回この研修に関わってくださった日本赤十字社の皆さん、派遣メンバーの皆さん、マレーシアの施設・MRCの皆さん、学校関係者の皆さん、家族に言葉では表しきれない大きな感謝を伝えたいと思います。本当にありがとうございました。

Terima kasih banyak-banyak!





異文化の中で学んだこと

伊勢崎市立四ツ葉学園中等教育学校 1年(高校) 石原 詩音

「人と関わるうえで大切なことはなんだろう」私の中にはずっとこの問いがある。日本とは言語や価値観といった前提といえるものが違う中でとるコミュニケーションとはどういったものなのか。私が今回の派遣事業に参加した理由の一つには、この問いの答えを見つけるといっても含まれている。

マレーシアの人たちは誰も彼もみな、私たちに寛容的だった。その中でも特に印象的だったのは二回の学校訪問だ。どちらの学校もバスを降りてすぐから歓迎してくれ、民族衣装を着て音楽や踊りなどを披露してくださった。そのどれもが素敵だったこともそうだが、なによりも自分たちのために準備をして披露してくれたということに涙ぐむほど感動したことを覚えている。活動発表についてもそうだ。私は人前で話すことがあまり得意ではない。今回のような相手の反応を見ながら進行するという事は尚更だ。どうしても少し吃ってしまうし早口にもなってしまう。しかしマレーシアでの発表活動は端的に言ってとても楽しかった。こちらからの呼びかけや説明に大きく反応をくれる、いってしまえばそれだけのことかもしれない。それでも本当に嬉しかった。普段のような遣りづらさや嫌な緊張がなく、良い意味で自分が自分ではないように感じた。私の発表は客観的に見て上手くはなかったかもしれない、それでもこの経験は自分にとって貴重なものであったことは間違いがない。最後に交流活動についてだがこれが



私にとって一番難しかったことであり、一番成長できたものだろう。まず交流してみて、言語の壁がここまで厚いとは思わなかった。学校の授業とは全然違う、実際に英語でコミュニケーションをとるということはここまで難しいことなのかと驚いた。それでも相手に伝わるように工夫する、してもらおうということは想像していた以上に温かかった。英語以外のコミュニケーションでも私がマレー語でありがとうと言うと、相手もサマサマや日本語でどういたしましてと返してくれた。このことがとても嬉しく、印象に残っている。

マレーシアでの交流は心が温かくなるものが多かった。ではそれはなぜなのか。私はミーティング時の自分が楽しめば相手も楽しんでくれる、という先生のお話が印象に残っている。私が嬉しさを感じた交流の場面はこのことが共通しているだろう。また自分なりに考えてみて、相手が自分のことを考えてくれているということも共通していると思う。まず自分が楽しむ、相手のことを考える。当たり前のことだろう。しかし言語などの前提が異なって初めて、私はこのことを自分に置き換えて考えることができた。このことは今回の派遣事業がなければ気づけなかったことかもしれない。

人と関わるうえで大切なこと、今回の派遣事業で私はこの問いに対する一つの答えを見つけることができた。この貴重な経験をする機会をくださった皆さんに心から感謝を申し上げたい。





国境をこえた先にいる他者

清真学園高等学校・中学校 教諭 高橋 信博

私が国際交流派遣事業の引率を打診されたのは今年1月末のことでした。青少年赤十字に関わって7年と短い指導歴ではありますが、指導者として、また社会科教師として視野を広げる機会と捉えて引率をお受けしました。

私は写真係を担当したこともあり、6月の事前研修会からメンバーの活動の様子を撮影することが多く、クアラルンプールでも一眼レフとともに移動する日々でした。撮影技術が未熟なために決定的場面を逃すこともあり、写真係としての役割を十分に果たせず、申し訳なく思っています。しかし、ファインダー越しに見るメンバーの姿にはいつも驚かされました。マレーシア赤新月社や訪問先の病院では職員の方に果敢に英語で質問し、高い英語力と自発性を発揮していました。また、マレーシア赤新月社、IFRC、訪問先の学校での発表や交流活動は回を重ねるごとに聴衆を引きつけるものに工夫され、機材トラブルにも臨機応変に対応していました。そこには事前研修会でどこか緊張した面持ちだったメンバーはいませんでした。自信をもってマレーシアの人たちと関わろうとする積極的な姿勢は、挑戦が人を成長させることを実証していました。メンバーは一人ひとり、わずか数日のマレーシア派遣で大きく成長しました。そうした場面に立ち会えたことは何よりの幸せであり、国際交流の意義を感じました。

また、私は今、中学1年生を相手に地理を教える立場にいます。しかし、その土地を知る最も有効な学びは、現地に行ってその土地の人と語り合



い、その土地の料理を食べることです。今回の派遣はクアラルンプールという限られたエリアではありましたが、ビルが林立する著しい経済発展の中で生き活きと生きる人々の様子を知る機会ともなりました。様々な民族が街を行き交い、それぞれの仕方で祈りを捧げる姿がありました。夜になれば屋台が現れ、そこに並ぶ料理の数々からは甘い香りやスパイスの香りが漂い、生活の臭いが入り混じって街は独特な香りに包まれていました。学校訪問で出会った現地の子どもたちは明るく無邪気な様子でした。彼らが紹介してくれた舞踊や遊び、イスラーム書道、楽器は伝統文化を感じさせるものであった一方、スマートフォンで写真を撮り合い、インスタグラムの交換に興じる姿は日本の子どもたちを見ているようでした。国境をこえても子ども達の素直さは変わらないようです。

国境をこえた先にいる他者が、自分と同じ人間であることを肌で分かることは、頭で分かることは違います。青少年赤十字の実践目標の一つである「国際理解・親善」は、そうした体感をもってはじめて達成されるのではないかと考えます。そのために青少年赤十字の指導者として何ができるかを考え、実行していくことが、今後の私の課題なのだと思います。最後に、こうした学びを提供してくださったすべての関係者に感謝いたします。





マレーシアと日本の架け橋になれ

栃木県立鹿沼東高等学校 教諭 齋藤 有子

マレーシア研修に参加し、日常では経験することのできない貴重な経験をすることができた。その中で最も印象に残っているのが、国民性の温かさである。価値観や宗教など文化が異なる様々な人が、互いに許容し合い尊重し合う中で、日本では感じることもできない「寛容さ」や「多様性」を肌で感じた。宗教や歴史認識の相違により、各地で戦闘や紛争が起きている昨今の世界情勢において、私たちがこのマレーシアの地で学ぶことは多く、今回の研修の重要性を実感した。この研修に参加し、自分の目で見て耳で聞いて心で感じた15名のメンバーには、マレーシアの社会の多様性や寛容さを模範とし、日本を背負うリーダーとして、国際社会のあるべき姿の構築に尽力して欲しいと切に感じた。

また先ほども国民性の温かさに触れたが、どの訪問先でもたくさんの笑顔で盛大に歓迎していただいた。ホスピタリティとコミュニケーションを通して、自国の文化や慣習に誇りを持ち、その素晴らしさを少しでも私たちに伝えたいという熱いスピリッツが伝わった。特に、3県メンバーとマレーシアの高校生たちが、言語や文化の壁を越え、心を通わせ笑顔で交流する姿は、これからの両国にとっても、グローバル化が進む世界にとっても、非常に明るい未来を想起させた。これらの光景をはじめ、誰もが笑顔に溢れ輝きに満ちた素晴らしい交流研修であったと心から思える5日間であった。



そして、このような素晴らしい交流の背景には、日本メンバーひとり1人の個性と積極性が光った。5月中旬に行われた支部研修で初めて顔を合わせ、2週間後には発表スライドと英語での発表原稿の完成。直接会うことができない中、自分の考えを伝え他者の考えも受け入れ完成形を作り上げることは大変な準備であったろう。しかし、しっかりとやり遂げた。前泊では打ち解けた15人でさらに話し合いを重ねていく成長したメンバーの姿に驚嘆し、また感心した。さらに現地での発表ではトラブルに見舞われながらも、工夫し「伝える」「楽しませる」ために何ができるかを考え、主体的に行動できた。このように困難に立ち向かい、決して力を抜くことなく成功に向けて一丸となって前進したからこそ、マレーシアで過ごした時間がかけがえのない素晴らしいものになったのだと確信している。皆さんは本当に素晴らしい。

10代の多感な時期にこのような素晴らしい経験ができたことは、今後の人生においても大きな指針となるはずである。IFRCの三亀さんの言葉のように「何になりたいか」ではなく「何がしたいか」を自らに問いかけ、将来の自分を思い描いていって欲しい。

最後に、マレーシア施設の関係者の皆様、スタッフの方々、派遣団の皆様、そして計画・運営に当たり細部にまで御尽力くださった日赤群馬県支部の皆様へ深く感謝申し上げます。本当にありがとうございました。





☆ 勇往邁進 ☆

群馬県立伊勢崎工業高等学校 教諭 天宮 賢也

国際交流派遣を無事に終え、団長としての安堵感と参加メンバーが目を見張るほどの成長をしてくれたことに対する誇らしさ、今後どの様に活躍をするのか期待せずにはいられない気持ちでいっぱいになりました。

事前研修は初対面とは思えない良い雰囲気で行われました。発表練習では、互いの不明点や不安点を指摘しあい、相手の視点に立った配慮も行き届き、全員で良いものを作り上げようという気持ちが伝わってきました。

表敬訪問先では敬意と笑顔が心がけるとともに先見力を発揮し、会場や人数等の状況に応じたメンバー同士の共通理解が完璧でした。突発的なトラブルにも臨機応変に対応した姿は頼もしい限りでした。また、好感触を得て大変盛り上がりました。

一方、マレーシア側2校の歓迎ぶりは予想を大きく超えたもので、マレー・インド・中国等の民族ダンスや楽器演奏、伝統の軽食によるもてなし、流暢な日本語での活動紹介など、まるで映画の主人公になったかのような待遇に心を動かされました。我々以上に多くの時間をかけて準備いただいたことに心から感謝いたします。

両国ともに目標に向かって真摯に取り組む生徒の姿は本当に輝いていました。

メンバー同士の交流は言葉の壁を全く感じさせず、堂々としたものでした。SNSの交換により、各々の自由研究が現地生徒の視点を反映したものとなっているようです。ICTを効果的に活用した一場面でした。

滞在中の食事は日本人の口に合うものばかりで

した。体調不良者のゼロ。体調・メンタル管理も素晴らしかったです。

☆ 私の自由研究メモ ☆

「マレーシアの赤十字メンバーに対して大人や先生方の指導やアドバイスの方法の違いについて」現地の指導者に質問しました。

JRCの「人道」にあたる心を育てる活動については、「社会に対する責任」を育む活動を行っており、具体的には高齢者施設へ古着を集めて届ける、学校で料理を作って届ける支援活動を行っていることが分かりました。多くの活動は学校側から生徒へ提案された活動でした。90%以上の子どもが寮生活をしており、週末に活動を実施していることが確認できました。さらに、洪水などの災害に対する支援活動も行っているようです。

社会のニーズに学校側が応える活動を、生徒中心で実施していることが分かりました。また、「社会に対する責任」の考え方は、日本でのJRC活動にも責任が伴っていることを改めて認識させられる機会となりました。

メンバーに関わる大人は、赤新月の支部職員や学校の顧問の先生が該当するようです。

☆ 次回参加者へのアドバイス ☆

発表や講話・インタビューの際にメモを取ることは勿論ですが、補助機器としてボイスレコーダーやスマホの録音・文字起こし機能をお勧めします。振り返りに役立ちます。往路のスーツケースは半分の量にしましょう。





私の自由研究

日本赤十字社群馬県支部 組織振興課長 榎原 康弘

何より、今回の派遣に関わっていただいたすべての方々に感謝の気持ちを申し上げたい気持ちで一杯です。メンバー、指導者の先生方はもとより、送り出していただいたご家族、学校、また現地マレーシアの方々など、多くの人たちに大きく支えられて実施できた事業だったと振り返っています。

5泊6日のマレーシア派遣でしたが、「あっという間だった!」という感覚と、「密度が濃かった!」という思いが残るところです。

今回、短い期間に熱量が高い派遣事業を行ったとは言え、メンバー、指導者、そして各県事務局としては派遣先の検討を行うなどの会議を重ね、行程の策定、スタッフ会議、支部研修、事前研修、派遣へと繋げて来ました。

ひとつひとつを振り返ると、関わる人たちで、時間をかけ、考えを寄せ合い、温めて来たことが印象に残っています。何より、メンバーの「思い」に触れてからは、「目的」や「方向性」、そして、それに向かう「準備」や「協議」などが、より鮮明なものになり、加速して集約されて行くのを感じました。

そのような中、このマレーシア派遣においてメンバーが行うような「自由研究」を私自身もこっそり見守り、自分なりにも行ってみたいという思いに駆り立てられました。

ひとつには、令和元年度の派遣報告書を読ませていただき、何より学ぶことから「国際理解・親善」が始まることを感じました。また、フィールドワークを基調としたメンバーの研究は、最終的



には青少年赤十字のフィルターを通した「マレーシア総合科学」という学問体系(?)に集約されるのではないだろうかとの思いに至りました。

メンバー個々人が



興味を想起させ、それを自由な研究へと繋げ、集約させて1冊の報告書にまとめることがチームワークであり、成果物として次世代の派遣に繋がるのだと感じています。「総合(集約的)」なものとなることで、私たちの事業、そして、その魅力が引き継がれて行くのだと思います。

また、青少年赤十字の目的としては、「赤十字のやさしさや、思いやりのところ(人道的価値)を持った子どもを育成する」ということが挙げられます。よって、彼ら彼女らが、今の素直さや前向きな気持ちを持って「やさしい大人」になってもらえることが将来に向けての青少年赤十字の思いの中にあります。そして、このマレーシア派遣もそのためのものであって欲しいと感じています。

やさしさは、その人自身の本質でもありますが、人間の成長の過程においては、「心のゆとり」や「心の豊かさ」を育む中にあるのだと思います。今回、いくつもの準備や課題を慌ただしく平行して行いながらも、にこやかに前向きに冷静でいられるのは「心のゆとり」であり、心から異文化を理解し楽しめる姿勢は「心の豊かさ」の表れだと思いました。そして、メンバーは団員に、大人に、何よりマレーシアの仲間にやさしい人たちでした。

今回、「学ぶこと」や「主体的であること」は、人をやさしく成長させるものなのだと感じる機会でもありました。学校での毎日も、きっとやさしさに繋がっているのかと思います。私も一日一日を学びの機会として大切にしていきたいと思えます。

私の自由研究は今も続いています。



未来を繋ぐ

日本赤十字社群馬県支部 組織振興課 主事 境野 雄気

北関東三県支部の国際交流派遣事業は、新型コロナウイルスの影響で中断していた期間を経て5年ぶりの再出発となりました。担当者としては無事に事業を終えたことに安堵するとともに、この派遣事業を支えてくださった全ての方々に心から感謝しています。指導者の先生方、金子看護師、JTBの田野邊課長、功刀さん、現地ガイドのタイさん、通訳のオマールさん、IFRCの三亀さん、マレーシア赤新月社、ユースボランティアの皆さんなど、関係するすべての方々の協力なしには、この派遣は実現できませんでした。本当にありがとうございました。

私自身、今回の派遣の中で特に印象深かったのは、現地の学校を訪れた際のメンバーたちの姿です。マレーシア赤新月社の支援を受け、どの学校でも温かく迎えていただき、メンバーたちもその歓迎に応えていました。発表の場面では、機材トラブルが発生するアクシデントもありましたが、メンバーたちは臨機応変に対応し、その場を繋いでくれました。困難な状況に直面しながらも、堂々とした態度で臨む彼らを見て、確かな成長と頼もしさを感じた瞬間でした。

また、現地の生徒たちと接した時間は、単なる交流を超えた、深い理解と友情が芽生える場となりました。これまで練習してきた発表やレクリエーションをメンバーたちは自信を持って披露するとともに、現地の生徒たちと時間を忘れるほどに楽しく交流する姿が印象的でした。異なる文化や言葉の壁を越えて心を通わせるその瞬間に、この



派遣事業の目的である「国際理解・親善」がしっかりと達成されていることを強く実感しました。

海外派遣ということで担当者として準備段階からプレッシャーを感じていた事業でありましたが、帰国後、彼らの旅に携わることができてよかったと強く感じています。彼らと時間を共有し、成長を間近で見られたことは、日本赤十字社の職員としてだけではなく、これからの私自身の人生にとって財産になりました。本当にありがとう。

最後に、今回参加したメンバーには、これからも自分の「健康・安全」を大切にしたいうえで、マレーシアで得たものを、「奉仕」の気持ちを持って社会へ還元してください。皆さんが感じた経験や想いが学校や地域に広がっていくこと、そして、自分たちを日々支えてくれる家族や友人など、周囲の人々への感謝の気持ちを忘れずに、その感謝を行動で表していくことが、これから先の未来の「国際理解・親善」へ繋がる一歩になると思います。

今回の国際交流派遣事業を通じて得られた出会いや経験を糧に、メンバー一人ひとりがやさしい気持ちと広い視野を持って活躍していく姿を期待しています。



感想文

青少年赤十字国際交流派遣に参加して

前橋赤十字病院 看護師 金子早耶香

「青少年赤十字（以下JRC）って実際にどういうことをしているんだろう。」まずこの派遣のお話をいただいた時に思ったことでした。普段は病院勤務をしており、自分が学生の時もJRCに関わったことはありませんでした。そのため、まずはJRCについて調べました。実際的な活動はそれぞれの学校で異なるため生徒たちから教えてもらい、一人一人が高い意識と目的をもってJRC部やインターアクト部で活動していることを知りました。そして、生徒たちは初対面ではありながらも互いに尊重し、気遣い合う姿に感動を覚えました。

派遣看護師の役割である健康管理に関して、事前研修会でメンバーと個人面談を実施し、既往やアレルギー、酔いやすいかといった全般的なことを確認しました。メンバーの多くは飛行機が初めてであったり、海外も初めての生徒が多く、不安があるのも伺えました。不安がありながらも前向きに研修に望む姿に最大限生徒たちが今回の派遣事業で学びが得られるように健康面へのサポートに最善を尽くそうと強く感じました。そして、面談を行ったことでサポートするポイントを具体的に考えることができました。

7/21いよいよ5年ぶりの派遣事業です。COVID-19の流行の兆しもある中、全員が成田空港で再会できたことにまずは安堵しました。派遣期間中は健康管理ノートを用いて健康状態の確認

をしました。

入国日、気流の影響で酔う生徒もいましたが翌日からスケジュールも全員が問題なく参加できました。毎朝出発前に各県連絡調整員より健康管理ノートを集



めてもらいました。生徒の中には直接声はかけてこなくても私に一言伝えたいことの欄に質問が書いてあることもあったのでバスの中ですぐに確認し、バスを降りた際に返答するようにしました。また、前日不眠等の記載があった生徒に対しては交流の合間に声をかけ、交流中も様子を観察しました。

どの訪問場所でも大歓迎で迎えられ、生徒たちもとても楽しそうな笑顔がたくさん見られました。普段の旅行や学校の研修だけでは得られない特別な経験がこの派遣事業によって得られていると感じました。また、派遣期間中、不安や心配なことがある生徒もいたと思いますが食事が合わない時は日本から持参した食べ物を食べたり、スケジュールが詰まっている状況でしたがバスで休憩をとったりとメンバー自身が健康管理を行い、注意し行動できた結果無事にこの事業を終えられたのだと思います。

今回この事業に参加させてもらい、JRCと世界の赤十字の活動を知ることができました。団員メンバー、指導者の天宮先生、高橋先生、齋藤先生、群馬県支部榎原課長、境野さんと出会うことができ、看護師としても多くのことを経験し、学ぶことができたことに深く感謝いたします。



事前研修会

〔令和6年6月1日(土)～2日(日) 日本赤十字社本社504会議室〕



事後研修会

〔令和6年9月22日(日)～23日(月・祝) 日本赤十字社本社504会議室〕



お世話になった方たち



功刀さん(株)JTB添乗員



タイさん(現地ガイド)



オマルさん(現地通訳)

お土産贈呈



